



特集:キリ大のある場所 : p.2
 日本で学びたいのに——コロナが阻む留学生の入国 : p.8
 Think globally, act locally. 佐藤優実氏 : p.12
 A_People 吉田直樹氏 : p.13
 お邪魔します! あのメジャー 音楽 佐藤望教授 : p.17
 From the University 牧場を渡る風 : p.18
 桜祭りのお知らせ : p.22

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY

ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585
TEL&FAX : 0422 33 3320
<https://www.icualumni.com/>
E-mail : aaoffice@icualumni.com

ALUMNI NEWS
VOL.136 MAR.2022



ICU×COMM



photo: 望月厚志 (キャンパス風景)

特集

キリ大のある場所 —— 地域のなかのICU

「キリ大」。大学周辺の地元の人たちは、愛着を込めてICUのことをこう呼ぶ。ぼくはずっと国際基督教大学はICUだとばかり思っていたから、初めて「キリ大」という言葉を耳にしたときには少し違和感を覚えたことを記憶している。学校法人の中期計画でも「社会との連携、地域との連携の一層の推進」掲げるICU。実際、地域と大学との関係はどのようになっているのか？ 今号の特集では「地域と大学」をテーマに地域社会との関わりを掘り下げてみた。

文：神内一郎（本誌）

住環境としての三鷹市周辺

地域周辺との関わりで真っ先に思いつくのが学生の下宿先としての地域社会だ。学生向けの下宿先などの紹介サービスも行っている株式会社ICUサービスのクレア良子事業部長に最近の下宿事情について伺った。

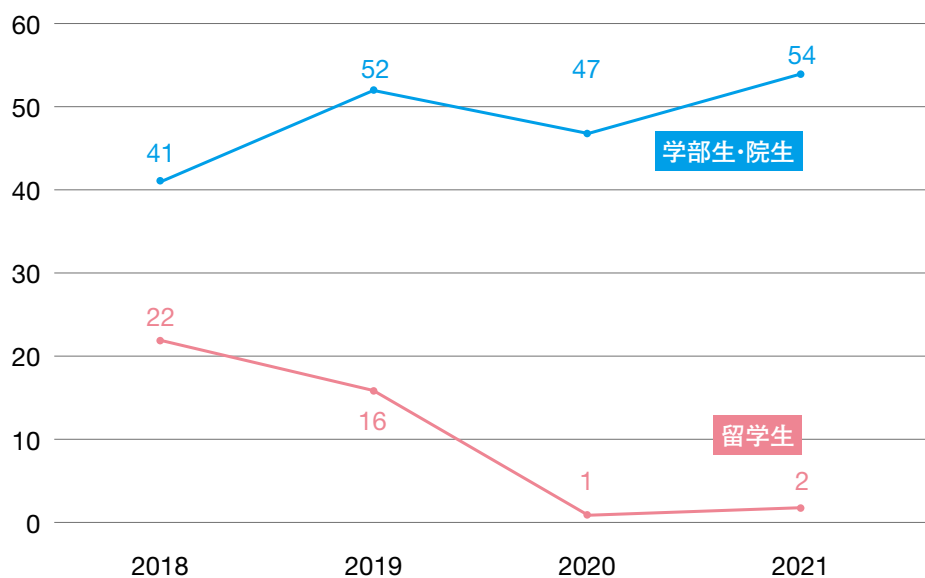
コロナ禍において大学周辺に住む留学生は大きく落ち込んでいるものの、学部生・院生の数に大きな変化はなく、むしろ2021年は増えている（右図「ICU下宿生推移」参照）。これは大学の寮がコロナ対策で人数制限をしていることが原因ではないかとのこと。家賃は月5万円から7万円台で、オートロックや防犯カメラ付きの物件などセキュリティがしっかりしている物件が好まれる。学生専門の寮タイプが根

強い人気がありつつ、最近は二極化が進んでおり、安さ重視の学生と、新築でなければダメといったクオリティ重視の学生に分かれる傾向があるようだ。前者はいわば「単身赴任」学生とでも呼ぶ、実家が通学圏にはあるものの毎日通うのは大変なため、平日は下宿、休日は実家で過ごす生活スタイルをとる学生に人気があるのではないかと推察されるところ。ICUサービスでは、学生の様々なニーズに合った学外の下宿を紹介する『ICU生のための住まいガイド』（写真）を毎年作成し合格者向けに発送している他、大学が作成している新入生向けのWebサイトやハンドブックなどでもICUサービスの学外下宿紹介情報リンクを掲載し、デジタルでの情報提供及び申込みが可能となっている。



『ICU生のための住まいガイド2022』

ICU下宿生推移 2018-2021年



UNITY

ICUと三鷹を見つめて ——この20年を、市民の視点から

ICUと地域はどのように結びついてきたのだろう。学生時代は一時的に三鷹に住んでも卒業すれば各地に散ってしまう同窓生が大多数であるとはいえ、地域に根づいて居住する人も少なからずいる。そんな「卒業後もキャンパス周辺を離れがたく、留まってきた一同窓生」で、長年三鷹で地域活動に参画するお一人、米川充さんにご寄稿いただいた。

文・写真：米川充 (45 ID01)

少し長めの自己紹介

25年前、1997年の春、英語が大の苦手にもかかわらずなぜか合格し、茨城の田舎からICUに紛れ込むことに成功。政治やまちづくりに関心があったため、社会科学科に入りましたが、実際のディビジョンは「D」、D館族でした。ICU祭実行委員会で1998・99年度と委員長を務めた際は、ICU祭を「『学生・教職員・同窓生にとってのお祭り』であると同時に、『ICUと地域をつなぐ場』」であると定義づけました。しかしながら、傾いていた委員会を仲間と立て直すのに追われ、具体的な連携を実現することは叶いませんでした。

また、引退後の4年次には、学生企画による創立50周年事業の認定をいただき、学生のニーズ調査を行う活動をしていたため、職員の方に顔見知りの多い、謎の学生ができました。

社会に出てからも、それら学生時代の活動の楽しさが忘れられないでいたところに、大学の地元・三鷹市の「市民活動が活発」という環境が広がっていました。市の自治基本条例策定への提言活動を行う団体での活動や、市のNPO・市民活動支援センターである「三鷹市市民協働センター」の運営委員などの経験を経て、「まちづくりを本業にしたい」と勘違いして市議会議員に立候補。2度も落選するという稀有な体験もしました。

そして、その後も懲りずに、地域活動どうしをつなぐイベント、都市農業の応援や地方との交流人口づくり、子どもの学校のPTAなど、縦横に動き回ってきた結果、「市民活動の現場か

ら農業や商工業、行政や議会、そしてICU学内も知己が多い」という、謎の三鷹市民、学生にとっては謎の同窓生ができあがりました。

これに学生時代の初心である「大学と地域をつなげたい」という思いも相まって、ICU生や大学の地域における活動について、お手伝いするチャンスや情報に接する機会に恵まれ、この20年を過ごしてきたという次第です。

ICUと三鷹のご縁、そのはじまりは……

はじめに、きわめて雑駁ですが、ICUと三鷹とのご縁を振り返ってまいります。

皆さんは、ICU開学前、このキャンパスに何があったのかはご存じでしょうか？ そう、中島飛行機三鷹研究所です。では、その前は？

はい、武蔵野の雑木林……。ではありません。もちろん広大な敷地にはそうした場所もありました。しかし、今のキャンパスの中心部は、「大沢新田」と呼ばれる大沢地区の新たな開墾地であり、この土地を切り拓いた農家さんたちが暮らしていました。

ICU開学に奔走した先達たちにとっての「約束の土地」も、地元の方々にとっては「戦争が終わって還ってくるかもしれない土地」だったのです。このため、土地の購入交渉は難航したと伝えられています。

冬になると、学内の雑木林で、地元の農家さんが落ち葉集めをしているのを見たことがある方は多いと思います。これは、交渉の結果、地元農家さんたちの入会（いりあい）権が残されたことによるものです。

そうした、ICU・地域双方の労苦を経て誕生したこのキャンパス。当時の先輩方は、「地域」をどう捉えていたのだろうかと『卒業生のICU40年』や『ICU 3期生 卒業後50年の歩み』を改めて読み返してみました。しかしながら、学生生活にまつわるエピソードはキャンパス内でのことばかりで、近隣地域に触れたものはほぼありませんでした。

これは、ICUでは、学生の学びと暮らしがキャンパス内で完結することを志向していたこと、そして、そもそも当時はまだ学生生活の受け皿となるような商店やアパートが大学周辺に立地していなかったことによるものです。

しかし、地域の側にとっては、ICUというユニークな大学の立地は印象深いことだったようです。身近な例で恐縮ですが、学生時代から約9年を過ごしたアパートの大家さんは、歴代そこに暮らしてきたICUの先輩たちのエピソードをはじめ、開学当初のエピソードをよく語ってくれました。「ロックフェラーさんが自転車でその辺を走っていてね」「寮生たちが大沢八幡神社の御神輿を担いでくれて」と、楽しそうに話す姿が懐かしく思い出されます。

大学史や同窓生の回顧録の上では、「地域」の存在感は高くありません。しかし、「地域」の側にとっては、ICUは確かに強い存在感を放っていたのだと思います。

「先進自治体・三鷹」の背後には、ICUの存在が

そしてまた、大学史にはあまり触れられていない側面として、「先進自治体・三鷹」へのICUの貢献が挙げられ

ます。

今でこそ、シュリンクする日本社会において、どの自治体も必死の改革に追われていますが、十数年前までは、一部の自治体の先進的な取り組みが全国に知られるという状況でした。その中で、三鷹市は「日本初の下水道普及率100%」「市民会議による計画策定」など、常に時代を先取りするトップランナーだったのです。

そして、その実績の裏では、ICUが大きな役割を果たしていました。例えば、1975年に策定された「第一次三鷹市基本構想」はICUとの共同研究がベースとなったものですし、1988年には、ICU社会科学研究所に市と大学の共同設置による「三鷹市まちづくり研究会」が設けられ、その後の先進的な施策のシーズが生まれました。

また、創立以来、学識者委員として多くの先生方が市政に関わってこられました。私が見聞きしてきたこの20年余りでは、西尾隆先生、故・新津晃一先生が特に大きな存在です。メンバーとして市民活動を担われたり、公的な会議以外の場でも多くの行政関係者や市民とざっくばらんに交流されたりして、信頼関係を築いてこられました。

私が学生の頃、新津先生が開講しておられた「地域社会研究」という、市民の方々とともに三鷹市の政策を学ぶ授業を履修しました。のちに、当時の受講者名簿を眺めてみたところ、市政に重きをなすキーパーソンの市民の方ばかりで、「学生時代にすでに出会っていたんだ」と驚いたことがあります。

学生・大学と地域を取り巻く



2016年度ICU祭にて、地元「みたか連」による阿波踊り（2016年10月）



「サービス・ラーニング入門」にて、地域のことをお話しする筆者（2017年5月）



2017年度ICU祭にて、地域情報をまとめたパンフレットが制作された
(2017年10月)



2018年度ICU祭で地元農家さんによる野菜販売



地産地消プロジェクトの取り組み。三鷹特産のキウイが学食に
(2018年4月)

環境の変化

そうして、ICUと地域の連携に役立ちたいとの思いを持ちながら、この地に暮らし、地域だけでなく同窓会でも活動し続けてきましたが、なかなか同じ思いで地域に出てきてくれる奇特定のICU生は現れませんでした(苦笑)。

もちろん、地方自治やコミュニティに関心を持ち、対象として三鷹を選んでくれるICU生は存在していました。しかしながら、多くは授業のリポートや卒論のためのリサーチであり、地域を「活動や学びの場」とする、さらには「一員となる」という動きはあまり見られなかったのです。

そうした風向きの変化を感じたのは、2010年代に入ってからです。それまでも、学生や若手社会人の中で、地域活性化や新しいコミュニティづくりなど「ソーシャルな活動」への関心が高まってきていましたが、3.11後にそれが一気に加速したこと、2014年に政府が掲げた「地方創生」、2015年のSDGsなど、学生が大学近隣の「地域」や「コミュニティ」に目を向ける素地が少しずつかたちづくられてきたように思います。

また、大学と地域との連携についても、社会的要請が強まってきている現状があります。2004年の国立大学法人及び公立大学法人制度、2007年の学校教育法改正(大学の目的として、従来の「教育・研究」に「社会貢献」が追加)、そして、2013年の文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学

COC)」以降の、地方活性化のためのリソースとして大学を活用しようという動きなどです。また、大学の側も、地方の大学においては生き残りの手段として、都市部の大学においては学生の学びの場として、地域連携に取り組む事例が増えています。

三鷹における「大学と地域」

三鷹でも、この10年ほどで、大学と地域との距離感が大きく縮まりましたが、そのきっかけとしては、杏林大学八王子キャンパスの三鷹移転、その杏林大学が「地(知)の拠点整備事業」に採択されたことが挙げられます。

特に、市民レベルの地域と大学との関係では、三鷹市市民協働センターにて2013年3月に開催されたシンポジウム「ご近所大学こんにちは——市民と大学でできるまちづくり」、同年12月に開催されたトークサロン「飛び出そう、地域へ!——学生(わたしたち)が創る“みたか”の未来」がターニングポイントとなりました。

前者では、杏林大学の古本泰之准教授(現・教授)、ルーテル学院大学の秋貞由美子専任講師(当時)とともに、ICUからはサービス・ラーニング・センターの村上むつ子講師・コーディネーター(当時)が登壇。市内の大学の地域連携の担い手が一堂に会し、参加した地域のプレイヤーたちとの直接の交流が生まれました。

そして、このシンポジウムをもとに、学生と地域の出会いの場として開催されたのが後者です。ICUから参加した

学生たちは、「ICUボランティアセンター」というサークルを設立、地域からの求めに応じて、地域イベントのサポートの活動をスタートしました。

しかしながら、コアメンバーを除けば、ICU生の地域への関心はまだまだ低かったこと、それに、地域の側にも課題があり、この活動自体は今に続いていません。

地域の側の課題とは、率直に言えば「学生はいくらでも時間があるから」という一昔前の学生観です。履修した授業にはすべてきちんと出席し、バイトもこなし、という多忙な現代の学生生活はまだあまり認識されていません。それにより、「あれもこれもやってもらおう」と、地域の側が過大な期待を寄せてしまい、学生が実際に割ける時間とのギャップが生じてしまったのです。

もちろん、サークルそのものは存続しなかったものの、その活動は、現在の数多くの連携を生み出す下地となりました。

「留学生×地域」の展開、それを支える「Glocalみたか」

一方、一般のICU生や大学による地域連携に先行して実績を重ね、地域との草の根レベルでの信頼関係を確立しているのが、「留学生」の分野です。そして、ここに至る歩みにおいては、米国のリベラルアーツカレッジ、ミドルベリー大学との協定に基づいて学内に置かれているミドルベリー大学日本校の存在、その「ニーズ」と「人」に

よるところが極めて大でした。

まず、「ニーズ」です。ミドルベリー大学プログラムへの参加には、2年以上の日本語学習経験と、滞在中は日常生活も含めて日本語を使用するというプレッジが求められます。また、ミドルベリーの学生だけではなく、ウェルズリー大学やコロンビア大学など他大学からの参加も受け入れており、「日本で学ぶ」「日本を知る」ことに強い意欲を持つ学生たちが留学してきます。このため、寮での暮らしと、キャンパスでの学びを提供するだけでは、彼ら彼女らのニーズを満たすことができないのです。

そこで、学期外の地方での学修プログラムのほか、学期中には大学近隣の地域コミュニティにおけるインターンシップが必修科目として組み込まれています。

そして「人」とは、ミドルベリー大学日本校のディレクター・江田早苗准教授(ICU客員准教授)です。2010年にICU内にオフィスが設置されて以来、常駐の教員としてプログラムの企画と運営を担われ、学生のインターンシップ先を切り拓き、地域との信頼関係と学生の学びのかたちを築き上げてこられました。

さらに、幸運なことに、「留学生×地域」というトピックについては、地域の側も「人」に恵まれました。その代表的な存在が、同窓生の角間裕さん(37 ID93)です。三鷹市役所に勤務しながら、趣味の地域活動として、ICUの留学生の地域活動をサポートさ



農家さんによる学内での落ち葉集め。近年では地域の方や学生によるボランティアも(2018年2月)



ミドルベリー大学日本校。地域の方をお招きしての発表会
(2018年11月)



ミドルベリー大学日本校。発表会当日の会場風景
(2018年11月)



地産地消プロジェクトの取り組み。学食での産直野菜販売のお知らせ (2019年2月)



ICU留学生と地域団体を結ぶ、地域活動オリエンテーション (2019年9月)



三鷹市立第二小学校にて。学生による小学生向けSDGsワークショップ (2021年5月)

れています。

江田先生と角間さんのコラボレーションの第一歩は、2014年6月に三鷹市市民協働センターで開催された「ICU留学生による地域参加活動報告会——地域・留学生の連携と多様性のある社会づくり」というイベントです。

留学生の地域での活動について、対外的な発表の場を設けたいという江田先生の思いを受けて、「みたか地域国際連携研究会」という任意団体の主催として実施したものです。その後、会は「Glocalみたか」と名を改め、留学生の活動を応援したい市民、江田先生や西尾隆先生をはじめとする教員・職員の方々の有志としての参加も得ながら、今に続いています。

その活動の中でも、ICUと地域とのご縁を深めるのに大きな役割を果たしてきたのが、ミドルベリーやカリフォルニア大学、JDSプログラムなど留学生全体の地域活動支援のために定期的に学内で開催してきた「地域活動オリエンテーション」です。若者支援のNPO法人、若い家族や子どもたちの居場所づくりに取り組む町会、歩行者天国など開かれた場づくりを展開する商店会、JA東京むさし三鷹地区青壮年部の若手都市農家さん、近隣の公立学校の校長先生などなど、留学生の多様な受け入れ先が参加し、それぞれの活動を紹介し合う場です。

この取り組みを重ねてきたことによ

って、留学生にとどまらず、運営を手伝ってくれた一般学生、様子を見に参加してくださった教員・職員の皆さん、そして参加者同士のご縁が深まり、新しい展開が生まれていくための豊かな土壌が形成されていきました。

「ICU祭」と「都市農業」がそれに続く

こうして「留学生×地域」の積み重ねによって、十分に肥沃になった土地の上に、2010年代後半になって新しい2つの芽が出てきました。「ICU祭」と「ICU生×都市農業」です。

2016年度のICU祭では、新たに「地域と大学の交流の場」としての役割を掲げ、「ICU生ゴヨウタシ横丁」という企画が行われました。これは、ICU生が日頃お世話になっているお店の方々に出店していただくことで、「ICU生が生活している地域のことを、保護者や受験生に知ってもらう」「ICU生が地域のお店を知り、新たな交流が生まれる」ことを目的とした企画です。地域の個人店からJAまで、13店舗・団体ものの参加がありました。

その後もかたちを変えつつ、地域との連携は継続してきましたが、コロナ禍による2020年度の中止、2021年度のオンライン開催によって、残念ながら具体的な取り組みは休止状態となっています。

また、もう一つの「ICU生×都市

農業」。これは、3人の学生が学外のNGO活動に参加した際、何らかのアクションを大学で実践するという課題が出されたことをきっかけとして生まれました。その学生たちが考案したのが、地場の野菜を使ったメニューを企画し、学食で展開するというプロジェクトです。

すでに大学食堂が三鷹市新川の都市農家・根岸隆好さんと取引があったこと、その根岸さんが、留学生の地域活動を支えてくださっているJA東京むさし三鷹地区青壮年部のコアメンバーであったこともあり、連携が進み、学生が考案した地産地消メニューを期間限定で提供する企画が実現。その年の7月、地場夏野菜をつかった「食べてみたカレー」が誕生しました。

この取り組みは「ICU地産地消プロジェクト」として拡大し、学食で地場野菜を販売する「ICU Local Veggies Market」や都市農家さんを紹介するWEBサイトの展開など、活動の幅を広げています。

コロナ禍2年目の急展開

そして、コロナ禍2年目の2021年度。これまでにない大きな動きがありました。

国内外でのサービス活動を通した学修科目「サービス・ラーニング」を履修する学生が、従来の海外や地方での活動が困難な中、多くが三鷹をフィー

ルドとして選択したのです。町会や商店会、地域と公立学校の連携プロジェクトなどさまざまな地域活動の現場への参画、公立小学校でのSDGsワークショップの主催など、2021年度春学期は、三鷹のあちこちでICU生の主体的な活躍が見られました。

これが一時的な現象か、今後も続いていくのかはわかりませんが、これが可能であった背景には、これまでに述べてきたICU・地域双方の蓄積があったことは確かです。

結びに

ここに至るまでには、学生、教員・職員、同窓生、そして地域の側にも多くのキーパーソンの存在がありました。また、大学と三鷹市、大学と都市農業など、公的な連携も始まっています。今回ご紹介したのは、市民レベルの「地域」に関する話題を中心に、ごく一部の事例に過ぎません。

ICU生と大学とが、三鷹や近隣の地域とさらに連携を深め、互いに学びと成長を得られる安定的な関係を築いていくためには、私たち、地域に住まう同窓生の存在と協力が重要になってくると考えられます。

今回のお話にご興味をお持ちくださった方、ぜひ、一緒に地域からICUをサポートしてまいりましょう。

(筆者連絡先)
mitsuru.yonekawa@alm.icu.ac.jp



PEACEMIND

私たちは、「はたらくをよくなる®」会社です。

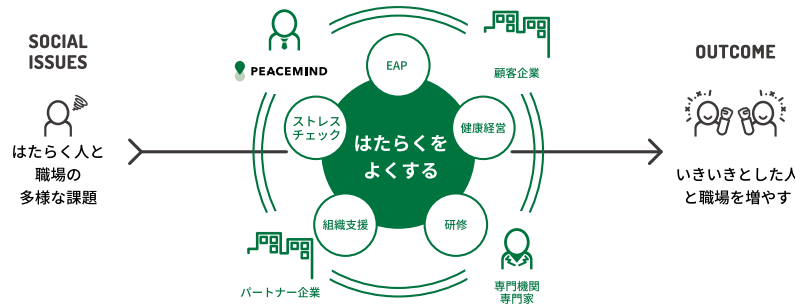
ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに1998年に創業した「はたらくをよくなる」ソリューションを提供している企業です。職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の方からのご相談をお受けしています。国内外のグローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。



ピースマインド株式会社
代表取締役社長・共同創業者
荻原 英人 (ID00)

Working Better Together®

「はたらくをよくなる」ために、働く人と職場を支援する様々な専門サービスをご提供しています。



EAP従業員支援プログラム	研修	ハラスメント対策支援	ウェルネスプログラム
ストレスチェック	クライシス支援	休職・復職支援	健康経営支援

サービス開始から お取引企業 外資系顧客構成比

23年 1,200社/年 35%

03-3541-8660
<https://www.peacemind.co.jp/>





<https://note.com/ogihide>



荻原英人社長が各界のリーダーと対談し、「はたらくをよくなる」を考えるコラムです。ぜひご覧ください。

管理部 人事総務グループ長
小島 真理 (ID87)



キャンパス産のハチミツはいかが？ —— 学生の養蜂プロジェクトが初の「収穫」

文：新村敏雄（本誌） 写真：ICU HONEY PROJECT

ICUキャンパスの奥の奥に、その活動の本拠地はある。活動の名称は「ICU HONEY PROJECT」。白い防護服に身を包んだ学生たちが週1回ほど、そこに置かれたミツバチの巣箱の世話をしている。

始まりは2018年度。藤沼良典准教授の授業のプレゼンテーションで学生たちが「養蜂」を提案した。2019年末にはメンバーも集まりプロジェクトの具体的な企画（注1：活動の目的）が大学の許可を得て、2020年から実際に巣箱を設置した。ところがそこへ新型コロナウイルスのパンデミックが起きてしまった。キャンパスへの人の立ち入りが大幅に制限され、巣箱もいったんは撤去し、活動は1年間休止せざるを得なくなった。2021年に入ってからようやく活動ができるようになり、5月と6月の2回、待望の「採蜜」にこぎつけた。

プロに指導あおぐ

活動を始めるにあたって重要なポイントが2つあった。まず、誰もどうやって蜂を育てるのか知らないから「指導者」が必要だ。プロジェクト創設メンバーはすでに吉祥寺などで養蜂プロジェクトを展開していた専門家、金子裕輝さんにサポートを依頼した。

次に資金。巣箱と、そこに入る蜂に始まり、巣枠、巣礎（ミツロウで人工的に作った六角形の巣穴の「下絵」）、燻煙器、遠心分離機などさまざまな道具類を調達しなくてはならない。プロジェクトは日本国際基督教大学財団（JICUF）の助成金に応募し、審査を通過して55万円あまりの活動資金を確保した。

現在代表を務める明石野乃香さん（ID23）と役員の米田彩加さん（ID23）にお話をお聞きすると、養蜂

の作業はなかなか大変そうだ。もっとも大事なのは蜂たちの健康を維持すること。蜂にはダニが寄生することがあり、巣箱全体に広がってしまう前に1年を通してダニの駆除が欠かせない。ダニは蜂のオスの幼虫が固まっている巣枠に集まる性質があり、春ごろは2週間に1回はオスの幼虫を巣から落とすことでダニを除去する。オスの幼虫が犠牲になることで巣箱全体の健康ひいては命運を守ることになるわけだ。

コロニーと呼ばれるひとつの群れに1匹だけいる女王蜂を増やさないことも重要な作業だ。コロニーの蜂は3種類。女王蜂は産卵だけが役目だ。あとは、交尾だけして巣の中の仕事をしないオス蜂、蜜や花粉を集めるほか、清掃や育児など巣の中の仕事もすべてを引き受ける働き蜂（メス）がいる。もし2匹め以上の女王蜂が産まれると、旧女王蜂は働き蜂の半分ほどを引き連れて巣箱を出てほかの場所にコロニーを作ろうとする（分蜂）が、キャンパス内で新しい巣を作られては困るので、分蜂をさせないためにも王台（新しい女王蜂の卵）を見つけたら「駆除」しなくてはならない。女王蜂が安定して産卵しているかの確認も、通年の重要な作業だ。

作業時は防護服は着るものの、手袋は必ずしもしないため、時には刺されることも。蜂が刺す理由は色々あるが、天気が悪いと機嫌が悪くなるほか、巣箱の扱いが丁寧でないと警戒心が強くなり刺されるという。「機嫌が悪い時は羽音がオクターブ上がるのでわかります」。

活動通じた気づき

5月と6月では、蜜が取れる花も異なっていることから味にも違いが出る。5月は菜の花、桜、梅など花の種類が

多いため花の香りが広がるさわやかな味なのに対して、6月はクセの少ない濃い味だったそうだ。「ハチミツを通して地域にどんな花が咲くのがわかります。成分調査をすれば、より正確に花の種類が特定できます」（米田さん）という。

プロジェクトを通じて学ぶことは多岐にわたるが、ミツバチはポリネーター（花粉媒介者）として野菜や果物の生産に重要な役割を果たしていると知ったのは大きいという。もしミツバチ以外も含めたポリネーターがいなくなると、受粉ができない結果、国連食糧農業機関（FAO）によれば、世界の作物の3分の1が失われる恐れがあると言われる。

採取したハチミツは、厚生労働省の指定する HACCP に基づいた衛生管理のもと、瓶詰め作業中で、最終的には80グラム入りで300本ほどできそうだ。価格は1本1,000円。販路は口コミのほか、大学食堂で週1回、地産地消プロジェクトが周辺の農家でとれた野菜を販売しているところに置かせてもらえないか、検討中だ。学外への一般販売はまだだが、寄付金の返礼品として用意はされている。

22年は巣箱を2つに

プロジェクトの今後についてもうかがった。大学からは「継続性」を言われているため、プロジェクトの存在を広く知ってもらうことは、メンバーを集めるためにも重要。当初は畑で活動紹介をしたりしたが、2021年はICU祭（オンライン開催）に出店したことをきっかけにより多くの人に活動を知ってもらうことができ、参加する学生が増えた。現在は50人ほどが登録している。Instagramのアカウントも開設した（注2）。「2022年は巣箱をもう一つ増やすほか、蜜源として、ヘアリーベッジという植物の種もまきました」（明石さん）。現在飼っているのはセイヨウミツバチだが、21年夏にはニホンミツバチも一時巣を作り始めた。2022年には、さらに新しい展開が期待できそうだ。

（注1）ICU Honey Projectの活動の目的（企画書から抜粋）

本活動の目的は、蜂群崩壊症候群（CCD）という問題を抱えるミツバチの保護と、ICUという身近な環境とハチミツという普段何気なく口にするような食べ物から、地球全体で起きている環境問題について考える機会を作ること。

（注2）https://www.instagram.com/icu_honeyproject/



〈ひげ〉探訪記

——ICUと切っても切れない居酒屋

ICUの正門を出て、天文台通りを右に約1分。
今年で開業50周年を迎えるやきとり店「ひげ」は、
半世紀にわたってICUの学生や教員たちから愛されてきた、
地域と大学との結びつきの象徴だ。
同店のオーナー・北岡房子さんや、かつてアルバイトとして働いた
ICUの卒業生から、お店とICUとの歴史をうかがった。

文：滝沢貴大（本誌）・関川紀世龍（ID25） 写真：関川紀世龍

オーナーから見た ICUとのつながり

開業は1972年。北岡さんは、「学生運動の中、学生と大人が議論のできる場を作りたかった」と開業の理由を話す。当時のICUは設立からそれほど時間がたっておらず、地方出身者が学生のメイン。大学周辺に飲食店がほとんどなかったこともあり、客の大半はICU関係者と富士重工（現・SUBARU）の社員で、アルバイトは全員ICU生だった。キャンパス内の掲示板に、「ひげに集合」と授業の案内を出す教員もいたほどで、お酒を飲みながら教員と学生が授業の続きをしたり、侃々諤々と議論をしたりして、盛り上がっていたという。外国人教員の中には「ひげでしていることの方がよほど大学の授業らしい」と話す人もいて、カナダ人の教員夫婦を北岡さんの地元・栃木に連れて行ったことも。お互い言葉はわからなかったが、帰国した際に「それが日本で一番楽しかった」と手紙が届いたことが思い出という。

留学生も当初からよく来店し、ひげでカタコトを覚えることから日本語学習が始まった学生も少なからず。中には、母国・アメリカに帰国後、同国のTV局に就職し、お店を取材しに来た元学生もいたという。また、留学生たちに目にかけていた北岡さんは、週に1回彼らをひげの2階に招待して、そこで地域の高齢者たちとの交流会を開

催。高齢者たちが彼らに食事やお酒をおごり、留学生たちが代わりに英語を教えていたという。

昭和から令和の時代まで、ICUのことを最も近い外側から見続けてきた北岡さん。「最近の学生はおとなしくなってしまった」と寂しげに話しつつ、「ひげとICUは切っても切れない関係」と言い切った。

元アルバイトから見た「ひげ」

ICUの卒業生で、現在は大東文化大学国際関係学部の講師を務める阿部（旧姓・吉村）武典さん（43 ID99）は、ひげでアルバイトをしていた一人。取材を依頼すると、「ひげはICU生だったときの居場所。『マイプレイス』です」と話し、当時の思い出やお店への思いを教えてくれた。

阿部さんによると、90年代当時、ひげのアルバイトには曜日ごとに部活や寮の「枠」があり、水曜日は代々剣道部員が担当。同部員だった阿部さんも先輩から引き継ぐ形で1年生から3年生までの間アルバイトを務め、後輩へと引き継いだ。ちなみに、カナダハウスやModern Music Society、バレーボール部などの枠もあったという。

仕事の内容は、フロアでの接客が中心。勤め始めて1年ほどしてからは、焼き鳥やモツ焼きの調理も担ったという。「焼き物は基本的にはガマさんが調理するので、乾き物など出来合いのものを盛り付けたり、飲み物を作った



りするのがメイン」。午後5時半に出勤し、店は午後6時前スタート。まかない付きで、退店前には飲み物1杯と串5本を食べることができたという。

ちなみに「ガマさん」とは当時マスターだった男性で、創業以来、北岡さんから店先のことを任されていた。2016年に亡くなり、次代のマスターは常連だったICU卒業生の男性が務めているという。

元アルバイトの視点から見ても、お店とICUとのつながりは不可欠なものだったと阿部さんは話す。「アルバイトがいるというだけでなく、お客さんとしても一番多いのはICU生。ひげをひいきにしている先生も何人もいて、とくに外国人の先生は多かった」。昨年退職したジョン C.マーハ教授は、「置き箸」をしているくらいだったと

いう。

店員としてだけではなく、阿部さんは客としてもひげへ通い詰めていたという。やることがないとふらっと立ち寄って1杯飲み、そうこうしているうちに知り合いが来店しよう1杯、日付が変わるころに店を出て、東八道路沿いにある「バスラーメン」を食べて帰るのが日課だった。今でも、ICUへ行く用事があれば、必ずひげに立ち寄るといふ。「やっぱり愛着があります。ひげは『居場所』で、あそこで人とのつながりもできました。気が置けなくて、落ち着く場所です」。阿部さんのICU生活を語る上で、「ひげ」は欠かすことのできない「マイプレイス」。この半世紀で、多くのICU生の学生時代の思い出の1ページに「ひげ」の存在があることだろう。

腰痛・頭痛・自律神経失調症を改善したいあなたへ

ICU卒業生の佃隆（44期ID00）とパートナーの佃美香が27年間運営しており、毎年1万人以上の方が来院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院には、ICU関係者の方が来院者の4割を占めています。当院では、関節の動きが鈍く神経の流れが悪くなっている箇所とあなたの症状との関連性を分析し、症状の原因を特定します。独自のつくだ式カイロプラクティックケアによる治療、「[姿勢の魔法]シャキーン!」メソッドによる知識、分子整合栄養医学による栄養の3本柱によって、症状改善だけでなく、姿勢矯正、ひいてはあなたの理想の暮らしを送る健康サポートをします。ICUとご縁のあるあなたのお役に立てましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平瀬ビル301号室

tel **0800-888-4270** 受付時間 ▶ 8:30～20:00

web <http://mitaka-chiro.com>

当院院長佃隆は
■1日3回で、ねこ背がよくなる「姿勢の魔法」シャキーン!
■姿勢をよくすると、人生がきらめく!
の2冊を出版しております。





photo: 望月厚志（キャンパス風景）

小特集

日本で学びたいのに —— コロナが阻む留学生の入学 キャンパスの多様性、日本学志望者数に影響も？

新型コロナウイルスの感染拡大で、ICUの多様性の一角を支える海外からの学生が入国できない状態が長期化している。授業はオンラインで受けることも可能ではあるが、時差が大きい地域からの受講は体力的、精神的負担が重く、留学自体をあきらめるケースも出てきている。大学は授業を通じて多様な学びを用意しており、なんとか迎え入れたいと対応を模索しているが、国の方針だけにいかんともしがたい面もある。

文・写真：新村敏雄（本誌）

ICUで学ぶ学生の出身国・地域は世界中に広がっている（表）。2021年10月時点でその合計は391人にのぼる。このうち、「留学」という在留資格を保有する学生は学部で89人、大学院で28人。

大学によれば、2021年11月末時点で日本への入国待ちの学生数は132人（学部・院・一年本科生＝OYR含む）。コロナで2021年1月以降、「私費外国人留学生」の入国は原則停止が続いていた。出入国在留管理庁の発表では、令和3年上半期における在留資格別の新規外国人入国者数のうち「留学」資格は7,708人。令和元年まで同資格の入国者は3年連続で12万人を超えていた（令和2年は49,748人）から激減ぶりがわかるが、その背後には、132人のような「入国したいのにできない」学生も多く存在するはずだ。

海外からの留学生が求められる入国までの手続きは簡単ではない。大学がひとりの留学希望者に入学許可を出したら、大学は地方出入国在留管理局に対してその学生に関する在留資格認定証明書（COE＝Certificate of Eligibility）の発行を申請する。証明書が発行されたら、次に大学は文部科学省と出入国在留管理庁に入国の申請書、誓約書、活動計画書などを提出し審査を受ける。これらの書類は、審査を通過したら留学生に送られ、留学生はそれらを持って各国の日本国在外公館に出向き、留学ビザの発行を申請するのだ。一連のプロセスは完了までに2か月ほどかかるという。

いったんは希望の光が見えたこともあった。オリンピック終了後、日本のコロナ感染者数は急減。それもあってか、文部科学省は、2021年11月8日

から「大学等の受入責任者による入国者の行動管理を条件として」入国停止措置を緩和すると発表した。「行動管理」とは、14日間（ワクチン接種済なら10日間）の待機と、もしそれが守られなかったら「受入責任者」である大学が責任を問われることを意味した。ただ、大学が隔離期間中の留学生の行動を逐一チェックするのは容易ではない。このため、入学準備を進める学生グループ（部署名）では、旅行会社が提供する入国待機者の管理サービスの契約を検討し始めた。

ところがその矢先の11月30日、オミクロン株の感染拡大を受けて、全世界から日本への外国人の入国が原則停止され、緩和措置が12月31日まで凍結されてしまった。めまぐるしく変わる日本政府の方針のため、マーク・ウィリアムズ国際学術交流副学長は入国

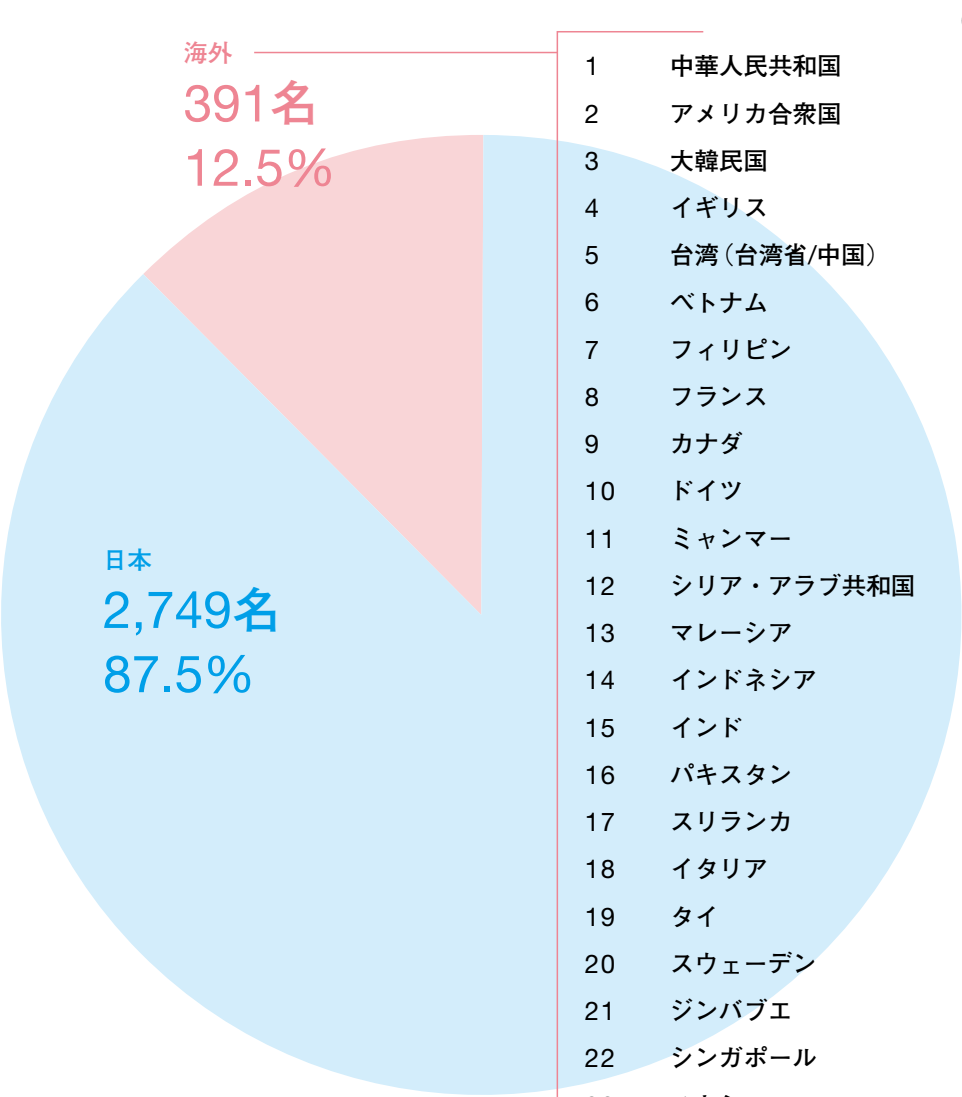
予定の学生に毎週のようにメールを送り「きのうお知らせした情報は忘れてください」と伝える日々だったという。この変更の結果、21年冬学期の入国はほとんどの留学予定者が間に合わなくなったばかりか、22年4月の入国も多くの学生にとって厳しくなってしまった。

入学を認められたのに入国が先延ばしにされてきた影響は小さくない。秋学期の授業を多くの留学生がオンラインで受講したが、リアルタイムでの参加が求められたため、欧州やアフリカなどの地域の学生にとっては、日本時間で午前中の授業であれば現地時間で深夜から明け方ごろまで起きていなければならない、負担は大きかった。

現在英国在住のある学生は「9月から毎晩、こちらの時間で午前1時から7時まで授業を受けています。昼間寝

ICUで学ぶ学生の出身国・地域

2021年10月1日現在



			(名)	
1	中華人民共和国	98		
2	アメリカ合衆国	60		
3	大韓民国	60		
4	イギリス	20		
5	台湾(台湾省/中国)	13		
6	ベトナム	13		
7	フィリピン	12		
8	フランス	7		
9	カナダ	6		
10	ドイツ	6		
11	ミャンマー	5		
12	シリア・アラブ共和国	5		
13	マレーシア	5		
14	インドネシア	5		
15	インド	5		
16	パキスタン	4		
17	スリランカ	4		
18	イタリア	4		
19	タイ	4		
20	スウェーデン	4		
21	ジンバブエ	4		
22	シンガポール	4		
23	メキシコ	3		
24	ポーランド	3		
25	ネパール	2		
26	ロシア連邦	2		
27	ベルギー	2		
28	カメルーン	2		
29	オーストラリア	2		
30	ブラジル	2		
31	モンゴル	2		
32	ケニア	2		
33	デンマーク	1		
34	カンボジア	1		
35	スロバキア	1		
36	トルコ	1		
37	エジプト	1		
38	オーストリア	1		
39	ギリシャ	1		
40	アルバニア	1		
41	チリ	1		
42	ニュージーランド	1		
43	バングラデシュ	1		
44	エルサルバドル	1		
45	ウガンダ	1		
46	フィンランド	1		
47	スペイン	1		
48	マダガスカル	1		
49	ホンジュラス	1		
50	ノルウェー	1		
51	ウクライナ	1		
52	アルゼンチン	1		
53	コソボ	1		

JDS (名)			
	2021 秋学期	2020 秋学期	2019 秋学期
中国	7	3	4
ネパール	0	0	2
ミャンマー	3	0	0
フィリピン	5	2	2
スリランカ	4	2	2
パキスタン	2	1	3
ベトナム	11	5	5
合計	32	13	18

留学生数 (名)	
学部	89
大学院	28

学部: 一年本科生0名、研究生0名を含む
大学院: 一年本科生0名を含む
上記留学生数は、在留資格「留学」を保持する学生の数。
その他の在留資格「家族滞在」「永住者の配偶者等」など
有する外国籍学生の数は含まない。



ようとするけど寝られない。この生活リズムでは友人や家族と切り離された気がするし、病院などにもいけない」と辛さを語る。別の学生は「私の友人は、コロナの状況が今より悪かった2020年の冬に日本に行けたのに、その時よりひどくない現在どうして私は入国できないのかと思ってしまう。22年の4月まで待つて必ず入国できるのかもわからない。秋学期のオンライン授業の内容には不満はないけれど、午後8時から午前5時まで起きていて受ける授業はもう避けたい」と悲痛な声をあげる。この学生は状況があまりに不透明なため、交換留学の辞退を決めたという。

ウィリアムズ副学長も「大半の学生は『大変だけど最後までがんばります』と言ってくれていますが、保護者から『子供は心が折れてしまった』と連絡をもらうケースもありました」という。

UCは留学生の派遣を見送り

非常事態ということで大学も特例を実施または検討している。入国できないなら休学したい、という学生の要望に対して、通常なら請求する休学費用の免除を決めた。留学期間が1年であ

れば2022年の春学期で終了するはずだが、秋学期まで履修期間を延長することも検討されている。「Language Buddies」というプログラムでは、100人超のICU生が海外の協定校の学生と1対1の「buddy」（パートナー）となり日本語と英語で交流している。

しかし、日本への入国の見通しが立たない状況に業を煮やして、ICUと交換留学協定を締結する大学によっては、留学生を送り出さないと決めたところもある。2020年にはICUではなく韓国へ留学生を送ったカリフォルニア大学(UC)は22年4月からICUを含む日本の大学への留学生の派遣を停止すると決定した。UCでは留学生がオンラインで授業を受けても単位と認定しないためだ。日本からの留学生はすでに海外に派遣しているため、ICUと協定校との間で受け入れ留学生の人数のバランスが崩れることも問題視された。UC以外の大学でも同様の措置が取られる可能性もあるという。

「長い目でみて、こうした入国制限が続けば、日本学を自分のキャリアとする学生が減ってってしまうおそれがあると思います」とウィリアムズ副学長は憂える。

ロータリーフェローにも影響

学生の絶対数では少ないものの、ICUには海外からの学生を受け入れるロータリー平和フェローやJDSプログラムのような制度もあるが、入国制限の影響は制度によって異なる。

ロータリー平和フェローでは、2021年度は6人が在籍しており、出身はアルゼンチン、オーストラリア/シエラレオネ、コンゴ、米国など。ただ、実際には入国制限のために3人が入国できておらず、別の2人は入国の見通しが立たないため、通常は認められない「休学」となっている。休学を選択したフェローはプログラム開始当初から入国できておらず、このまま日本に一度も入国しないでプログラムの終了を迎えてしまうのはあまりに残念なため、休学中に状況が好転することを願っての決断という。さらに、2021年9月入学予定であったフェローは全員入学延期を選択し、2022年9月に入学予定。

JDSプログラムは政府による留学生受け入れ事業で、窓口は中国以外の国については独立行政法人国際協力機構。中国からの受け入れは2013年度より「中国若手行政官等長期育成支援

事業」(JDS中国)へと枠組みを変更し、外務省から委託を受けて一般財団法人日本国際協力センターが窓口となっている。ICUは2001年から受け入れを始めた。2021年度の秋学期にはベトナム11人、中国7人、ミャンマー3人、フィリピン5人、スリランカ4人、パキスタン2人が在籍していた。

JDS、JDS中国とも私費留学生と異なりコロナによる入国制限はない。ICU以外の大学も含めた受け入れ数(修士)は2020年度が339人、2021年度は358人と2年連続で過去最高を更新した。



ウィリアムズ副学長

年会費割引がずっと続く！旅行に！ショッピングに！ Visa ゴールドカード！

海外&国内旅行傷害保険は最高 5,000万円 補償※！国内主要空港のラウンジは何度でも使える！
さらに同窓会にカード年会費とご利用代金の一部が還元されます！くわしくは同封のチラシをご覧ください。 ※カードの利用条件がございます。

ご入会&ご利用で
最大 23,000 円相当
キャッシュバック&ポイントプレゼント
2022.3.1~6.30
ICU 同窓会さま特別特典

三井住友トラスト VISA ゴールドカード



年会費 ~~11,000 円(税込)~~
2,750 円(税込)

▼お申し込み


ロードサービス VISA ゴールドカード



年会費 ~~12,100 円(税込)~~
3,300 円(税込)

▼お申し込み


●オンラインでお申し込みの際は団体コード入力欄に**50140**をご入力ください。
●ご家族カード年会費はいずれのカードも1,100円(税込)です。

お問い合わせ・申込書ご請求

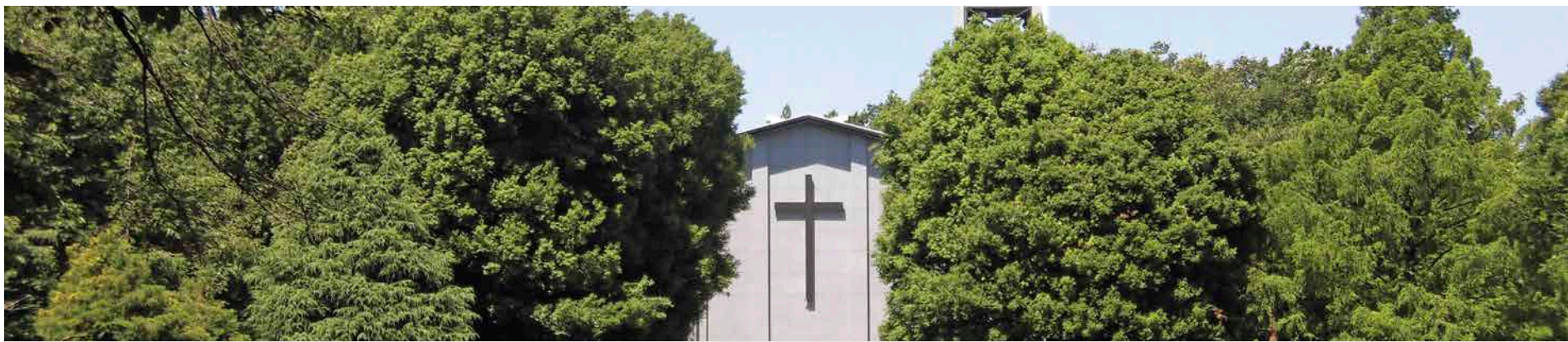
0120-370-070 受付時間: 9~17時(土・日・祝日・12/30~1/3を除く)

弊社は「個人情報の保護に関する法律」に基づき適正な保護を講じうえて、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。

お問い合わせの際は ①ご住所 ②お名前 ③お電話番号 ④ご住所⑤所属団体名: ICU 同窓会 (団体コード: **50140**) をお知らせください。

✉ **Moushikomi@smtcard.jp**





多様なアイデンティティが一堂に

—— リベラルアーツセミナーの授業から

留学生は大学に多様性をもたらす存在と受け止められているが、もちろん大学も授業を通じて彼らの期待に応えてきた。留学生が入学できていたならば、その存在がもっとも輝いたであろう授業の一つは、笹尾敏明特任教授の「リベラルアーツセミナー」（一般教育科目）ではないだろうか。

秋学期に開講した「Will the Real Peacemaker Please Stand Up? An Exploration into Peace Psychology in the Post COVID-19 Era」は、「コロナ禍後の時代に、平和心理学の視点から平和の構築を模索する」ことがゴールで、平和と個人の関係性を考察し、学生一人一人が自分のアイデンティティも見つめながらディスカッションを重ねていく。

10人の履修学生のうち、日本だけで育った学生は1人だけだった。日本人でも生まれ育ったのがチュニジア、上海、英国の学生もいれば、香港、台湾、シリア出身の留学生もあるなど、かなり異色の構成だ。

他の大学だと、学生の国籍が個人の「ラベル」のようになってしまいがちだが、「一人一人の生い立ちや経験などに基づくアイデンティティが大事にされるのがICUという環境」と笹尾教授は語る。「教える側

としても学ぶことが多かったですね」。

授業のテーマとして、世界で起きている時事的な問題も授業の中で取り上げることもある。例えば今回のコロナのことや、中国内部での問題のように、教室の学生の出身国を考えると、国を背負って意見が対立しそうな気もするが、「お互いを個人的に批判するような感じではなく、客観的に、学生なりに理解している政府の対応であるとかを議論しました」という。

難しい点は、たとえば日本人学生と韓国人学生にとって、平和問題を議論するとき、どちらも「自分はそこにいるし親戚や友人も同様、つまり『自分の立ち位置』が当事者になる」ゆえに、距離をおいて見ることができにくくなることだという。

今回受講生10人のうち、コロナの関係で4人は海外から受講した。ワシントンDC、香港、台湾、英国だ。4人のうちのひとり、カティア・カルトンシーノ (Katia Cartoncino) さんはイタリアはトスカナ地方出身でロンドンに8年在住し、ICUへ入学したが、コロナのために入学できなかった。子供のころから日本とその文化に対する憧れを抱いてきたという。

この授業を選んだのは「平和心理

学を、コロナのパンデミックだけでなく、人と人の関係性についてあてはめて考察するという内容に興味を持ったから」という。「時差はきつかったしリーディングアサインメントの量も多くて大変でしたが、違う考え方ができるようになりました」と語る。ヨーロッパ出身のカティアさんは、個人主義の文化で育ってきたので、コロナが拡大したら自分も含めてみな利己的に行動するのでは、と思っていたという。しかしリベラルアーツセミナーの授業で他の学生と議論し自分の意見もたくさん話したあとは、考えが変わった。「以前より他人を信じられるようになりました」。特に興味をひかれたのは、「社会的アイデンティティ理論」と自分が所属していると自覚する「内集団」、それ以外の「外集団」との間の関係性だったそうだ。「受講前はここまで深く人と人の関係性を掘り下げていく授業だとは想像していなかったもので、嬉しい驚きでした」と振り返る。

「とてもインタラクティブな授業でした」と語るカティアさんだが、さまざまな国籍やバックグラウンドを持つ留学生が多数いたクラスだったからこそ、そういう結果になった面もあるのではないだろうか。

笹尾先生はこの授業を始めるき

っかけとして「最近の学生を見ると、平和研究、教育学、経済学など何をやるにしても、自分との関係、自分がどこに位置するのかという立ち位置をはっきりさせないとだめかなということを、学び、意識してほしいかった」そうだ。また「現在の日本という国や日本人は、妙に満足してしまっている。平和であることに馴れてしまい、自分たちには関係ない、自分は平和で、金銭的にも、社会的地位、生活にも満足している」ことを危惧している。留学生がキャンパスに存在し、授業や教員との対話などを通してお互いに異なる考え方に触れることが、そうした現状に対する気づきにつながるかもしれない。



笹尾敏明特任教授

極太な人生と極太麺に幸あれ！

圭さん真子さんご結婚おめでとうございます！！



楽天通販絶賛販売中

*現在 NY へはお届けしていません。ご了承下さい。

武蔵野アブラ学会



← 楽天公式サイト

公式HP→



twitter@masaotin

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、
その地で活動を始めた経緯や
その地の魅力について話を聞く本シリーズ。
今回は、広島県の「ひろしま核なき持続可能な
未来ユース大使」(HOPeユース大使)に選出され、
2021年10月から活動している
佐藤優実さんにお話をうかがった。

平和の問題を自分のこととして 考え続ける仲間を増やしたい

広島県

ひろしま核なき持続可能な未来ユース大使 佐藤優実氏 (ID24)

文・写真：太田順子 (本誌)

Yuumi, SATO

宮城県で生まれ、小学校から高校卒業までを広島市
で過ごす。2020年4月ICU入学。メジャーは平和
研究。2022年秋よりドイツ・ベルリンに留学予定。



——「ひろしま核なき持続可能な未来ユース大使」(HOPeユース大使)について教えてください。

佐藤：2020年の被爆75年を契機に、広島県は、核兵器廃絶のための世界的な行動をすべての国、国際機関、企業を含む市民社会にあらためて呼びかける「ひろしまイニシアティブ」の策定を進めています。そこには、2030年までに核兵器廃絶が国際的合意となるよう取り組むこと、日本を含むすべての国の政府に対して核兵器禁止条約の署名・批准を求めること、核兵器の非人道性を世界に伝えていく若い世代を育成することなどが目標として掲げられています。

「HOPeユース大使」を公募した「へいわ創造機構ひろしま」(HOPe)は、この「ひろしまイニシアティブ」を推進する核廃絶実現のための研究拠点として、広島県と県内の国際機関・経済界・大学など19団体が共同で2021年4月に設立した団体です。今回、私を含む3人の女性が初代ユース大使として選ばれました。他の二人は、一人が広島市内の、もう一人はカンボジア出身で現在日本に留学中の、いずれも高校生です。任期は2年で、核廃絶に向けた平和のための取り組みについて、

HOPe事務局と協力して日本国内はもとより国際社会へPRを行ったり、国際会議に出席してHOPeについて発信したりするほか、自分たちで考えた企画も実施する予定です。

——なぜ応募したのでしょうか。

佐藤：私の祖母は被爆者で、母は被爆二世です。平和記念公園でガイドをしている母の姿をみていて、私も核の問題に関心をもつようになりました。高校1年生のときに「グローバル未来塾inひろしま」という高校生向けのプログラムに参加し、核軍縮や紛争解決など国際平和に関するさまざまな講義や英語研修を受けました。2週間のスタディーツアーで訪れたフィリピンでは、日本の加害の側面について初めて考える機会を得ました。その後、大学でも平和について学びたいと考えるようになった私に、幅広い視点で学ぶことができるからと父がICUを薦めてくれました。入学して、広島以外の場所で育った友人と話すうちに、意外と広島のこと知られていないこと、平和教育には地域によってさまざまな違いや偏りがあることに気づきました。

私もそうですが、広島だと家族に被爆者がいる人がたくさんいます。広島

の原爆と自分のアイデンティティが分かちがたく結びついている人が多いのです。学校教育のなかで被爆者の証言を聴く機会があって、平和記念公園や原爆ドーム、広島平和記念資料館にはみんな行ったことがある。夏休みも8月6日は登校日になっている。原爆はほんとうにひどいもので、「生きているうちに核なき世界を」と訴え続けてこられた被爆者の方々の思いは絶対に継承し、実現しなければならないのだということを、自分の問題として考えるようになります。でもそれは「広島」という場所の影響が大きかったのだなという気づきがあり、もっと私にできることはないかと考えていたときにユース大使の公募を見つけました。

——これからどんなことに取り組んでいきたいですか。

佐藤：ユース大使の任期中には、平和についてさまざまな角度から学んでい

てSDGsは関心の高いテーマですので、平和の問題を、格差・環境・ジェンダー・人権・経済など多角的な視点から学んだり研究したりしている人たちとつながって学びを深めていきたいです。その点、ICUのリベラルアーツの考え方に基づく学びの仕組みは、SDGsと親和性が高いというか、幅広く深く学ぶ場合にとても有効だと感じています。

より長いスパンでは、平和構築を支えるまちづくりについて考えたいと思っています。たとえば、ドイツをはじめヨーロッパでは、「つまずきの石(シュトルパーシュタイン)」という取り組みが1993年から続いています。ベルリン在住の彫刻家が始めたプロジェクトで、ナチスによる迫害者・犠牲者の氏名や生没年月日などを刻んだ正方形の真鍮版プレートを、10センチ角の立方体ブロックに貼り、その人びとが最後に住んでいた家の前の歩道に埋め込んだものです。2019年の時点で2,000の地域に75,000個以上敷設されているそうです。そのような、日常生活のなかで歴史や記憶の継承、平和について考え続けるきっかけを作る方法をまちづくりの課題として位置づけ、考え、取り組んでいきたいと思っています。

7_People 吉田直樹 (32 ID88)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

YOSHIDA, Naoki
1964年、大阪市生まれ。社会科学科を88年に卒業。INSEADでMBAを取得後、マッキンゼー社などを経て、2007年にドン・キホーテへ入社。取締役を経て、19年9月に代表取締役社長CEOに就任し、現在に至る。



社会科学科出身の吉田直樹さんは、総合ディスカウントストア「ドン・キホーテ」を運営するパン・パシフィック・インターナショナルホールディングスの社長。コロナ禍や少子高齢化で激動の時代を迎える小売業界で、同社の舵取りを担う。

文：滝沢貴大（本誌）

読書漬けのICU時代

大阪市出身。ICUへの進学を決めたきっかけは親の薦めだった。「身近にICU出身の牧師さんがいて、両親と祖父母のイチオシだった」。高校3年時にキャンパスを訪問すると、緑豊かな点などに魅了され、自ら志望するようになったという。

在学中は「あまり課外活動などはしていなかった」と振り返るが、日米学生会議の活動に参加するなどして過ごした。また、読書好きで、当時の愛読書はアメリカの人類学者グレゴリー・ベイトソンの“Steps to an Ecology of Mind”。ほかにも、関心のあった意味論やサイバネティクスに関する本などを読みふけた。「真面目に何かをやることに対して、ICUのキャンパスは『別に良いんじゃない』と言ってくれる雰囲気があり、親和性があった。とにかく色々な本を読み、考えていました」

幅広い関心の中で、卒論は経営学について扱った。のちに学長を務める鈴木典比古氏の着任のタイミングと重なったからだった。「着任してすぐ会いに行った。インディアナ大で経営学博士を取られた先生が来られたと聞き、興味を持った」。こうして鈴木ゼミの1期生となり、卒論では「新しい

消費社会の誕生」について掘り下げた。「(今の仕事を思うと) できすぎた話。当時は『大衆』の消費社会から、『個人』にスポットライトが当たった消費社会が来る、という論調がトレンドで、結局その通りになるわけだが、卒論のテーマでもあった」

MBAやコンサルタントを経て、人生初の小売業の世界へ

新卒では、リクルートへ。「多様な価値観を受け入れてくれる場所で、相性が良いかと思った」。その後、外資系の証券会社へ移り、95年に欧州経営大学院 (INSEAD) でMBAを取得後、マッキンゼーなどを経てコンサルタントとして独立。そして2007年、ドン・キホーテへ入社する。きっかけは、同社がハワイの会社を買収し、現地での事業を始めたもののうまくいかず、それをコンサルタントとして支援したことだった。仕事ぶりを見た創業者の安田隆夫氏から勧誘され、人生初の小売業の世界へ飛び込んだ。「一緒に仕事をする中で、『小売業って面白いな』って思い始めたのかも知れません。僕も40歳を超えていて、それなりに大きな決断でした」。海外事業本部長と子会社の「ドン・キホーテ (USA)」社長を皮切りに、本社の取締役など歴任し、19年、社長に就任

した。
入社直後から苦労は絶えなかった。「入社当時、会社は行政や銀行とケンカばかりしたりしていた。でも、創業者に『会社をどうしたいですか』と聞くと、『大きくなりたい、もっと人口に膾炙するような存在になりたい』と。そこにジレンマがあった」と振り返る。「私がやってきたことは、ベンチャー企業をある種のエスタブリッシュメントにすること。社内では『お店は面白く、会社は真面目に』と言ってきた。『ベンチャーから小売りの第三勢力になろうよ』と」。これまでの人生経験も生かして企業改革を進め、入社当時は約3千億円、地方のスーパーマーケット程度だった売り上げが、約1兆7千億円、イオン、イトーヨーカドーに次ぐほどの規模に成長する一翼を担った。

社長としての日々と、意気込み

社長就任後も苦労は続く。少子高齢化の進展に加え、新型コロナウイルスが大打撃を与えた。「国民の消費行動が大きく変わってしまった。これまで『時間消費型』の店作りをしてきたが、『なるべく店にいる時間を短くしたい、できれば来たくない』となってしまった」。こうした中、海外事業の拡大や、

プライベートブランドやEC (電子商取引) への注力など、新規事業を押し進めた。「かっこよく言うと、私の仕事は『変わっていく時代に対応し、会社の方向を決めること』。国内のマーケットはどんどん小さくなっていく。そうすると、経済学的に言うと『寡占化』が進む。イス取りゲームで残るために知恵を出さないといけない」。そう力を込める。

社長としての意気込みを聞いた。「単純だが、お客様に喜んでいただける商品や買い場を作っていきながら、オペレーションする人にとっても働きがいのある良い雰囲気の会社にしていきたい」。背景には、現場の従業員たちと接する中で得た気づきがある。「恵まれた環境で生まれ育ち、周囲も自分と同じような経歴の人ばかりだった。メイトさん (同社のアルバイトのこと) の中には、シングルマザーだったり、ダブルジョブをしていたりと苦労をされている方がたくさんいる。この会社に来るまで、そうした人たちのことが見えていなかった。いまの私の最大のプライドは、彼らと一緒に仕事ができること。彼らに目を向けることができるようになったのは、ICUで教育を受けた私の一つの答えになると考えています」

DAYトーク

2021年9月13日、2020年度のDAY受賞者5人のうち3人の方が参加して、オンライントークが実施された。
積極的な呼び掛けが功を奏し、参加登録者は96人、参加実数は64人に達した。(受賞者のエッセイは前号に掲載)

文：渡邊一美 (3)

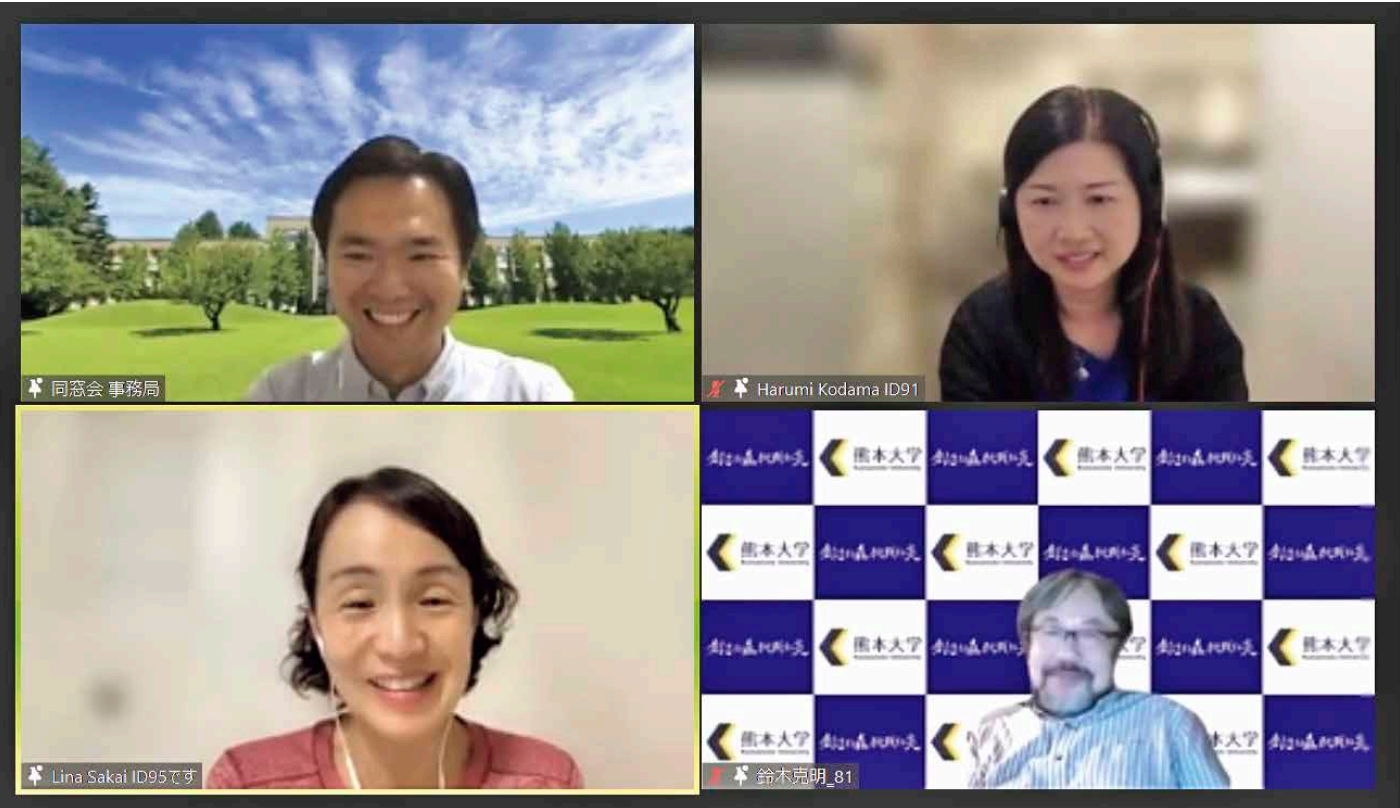
選考委員長の木越純氏 (27 ID83) の挨拶で、今回参加できなかった受賞者のお二人、パラリンピックで注目を集めたブラインドサッカーの普及に貢献されておられる松崎英吾氏 (47 ID03) と、世界の医療変革にチャレンジするプラットフォームを構築されたベンチャー企業エムスリーの代表であられる谷村格氏 (31 ID87) についても紹介があった。司会・進行は7人のDAY選考委員の中から竹川隆司氏 (44 ID00) が担当した。なお、アンケート回答者は26人であった。

鈴木克明氏 (25 ID81)

熊本大学教授、前日本教育工学会長

ICUに入学して初めてオーディオ・ビジュアルを生かした教育があることを知る。ロータリー財団奨学金を得てフロリダ州立大学でPh.D取得後、教育工学センター勤務。帰国後は東北学院大学教養学部教授、岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授、熊本大学大学院教授・教授システムセンター長を経て、現在に至る。日本におけるインストラクショナルデザインや、オンライン授業の創始者でもある。International Board for the Standard of Training, Performance and Instruction (ibstpi®) フェロー。これまでにアジア開発銀行、JICA等多くの国際協力プロジェクトにも関わった。“Go with the flow whenever it comes.”の姿勢で“新しい教育を創る人生”を過ごしている。

熊本大学ではインストラクショナルデザインを中心として以下の4つの“1”を教える教授システム学専攻に所属。①Instructional Design、②Information Technology、③Instructional Management、④Intellectual Propertyである。コロナ禍での教え方としては①対面授業にこだわるな、②無理をしない、③同じ価値を追求する、④順序を変える、⑤学生は学び続ける、⑥非同期で学習を支えることを推奨、コロナ禍はICT教育利用の本格化によりImproved Student Engagementを目指すチャンス。学生にとり大学が暇なところではない。何を目指し、何を残し、何を始めるのかを考えさせ、自主的自律的学習者を育てたい。私の原点はICUで受けた教育。“No Youth, No Japan”との対談で実現したように、これからは同窓生や後輩との出会いを楽しみにしている。



児玉治美氏 (35 ID91 G1994)

アジア開発銀行駐日代表

鹿児島県出身。子どもの頃の海外生活を経てICUへ進学。大学では国際政治に関心を持ち、模擬国連に打ち込むとともに、反アパルトヘイト運動にも取り組む。国際問題に熱心な国会議員の秘書として、1990年代には国連主催の人口、女性会議などに参加した。その後、東京に本部を置くNGOジョイセフに転職。バハマで3年間、エイズ予防・思春期保健のプロジェクトを手がける。その働きが認められ、国連人口基金 (UNFPA) から誘われる。ニューヨークの本部で2001年から2008年まで人口問題や女性の健康に携わり、途上国の現場を頻繁に訪れた。双子の出産を契機に、仕事と育児の両立がしやすいマニラに本部を置くアジア開発銀行 (ADB) に転職。ADBはアジアの途上国に対して開発援助を行っており、貧困削減、ジェンダー平等、気候変動など7つの優先課題に取り組んでいる。コロナ対策にも大規模な支援を行っている。2019年、女性初のADB駐日代表となり、18年ぶりに日本に戻る。日本の政府や民間との連携や国内での広報などが主な仕事だが、女性としてジェンダーやダイバーシティについて発信する機会が増え、日経新聞でも連載のコラムを担当。ADBの活動のPRに生かしている。

外から見た日本について少し述べたい。各種調査によると、ジェンダーの平等が世界では120位、報道の自由度では67位、外国人の住みやすさは32位、企業の時価総額ランキングではトヨタの41位が最高、起業のしやすさが106位、労働生産性はG7中最下位、

教育への公共支出ではOECD38カ国中37位となっている。元来自己主張が苦手な日本人だが、それは学生、企業人、外交官も同じである。

ではどうするか。まず現状に危機感を持つこと。過去の成功体験に甘んじた小さな幸福感から脱すること。正しい国際報道に敏感であること。「お上」への依存から脱却し、民間の活性化を図ること。シンクタンクや市民社会組織の役割を生かす。多様性を受け入れ、雇用形態は年功序列・終身雇用型からスキルを重視したジョブ型雇用へ転換。若人の登用や、教育改革でグローバルな人材を育てることも重要である。自分で考える力を養うことのできるICUのリベラルアーツにはこれからも大きな期待を寄せたい。

酒井里奈氏 (39 ID95)

ファーマンステーション代表取締役

卒業後、富士銀行、ドイツ銀行を経て東京農大応用生物科学部醸造科学科に入学、発酵・醸造を学ぶ。「未利用資源の有効活用技術の開発」に4年間取り組み、12年の試行錯誤を経てR&D Oriented Companyを立ち上げる。“Creating a Circular Economic Society Through its Original Fermentation”というコンセプトの下、原料製造からプロダクト製造へと進め、発酵についてのノウハウを築いた。地域循環産業 (Environmentally Friendly Manufacturing) による社会的インパクトを生むために、事業性と社会性を両立させるものとして、休耕田を利用し栽培したオーガニック米や、アサヒグループのリンゴシードルの搾りかす、ANAの規格外の輸入

バナナなどを発酵して製造するエタノールや発酵粕を原料として化粧品を開発した。ICU時代は周りの友人が眩しく見え、あまり勉強しなかったが、国際交流には関心があり、就職は富士銀行に入社、また国際交流基金 (Japan Foundation) に出向し、ビジネスと社会貢献の両立を目指すようになった。その結果が東京農大への入学であり、岩手県奥州市の休耕田活用プロジェクトへの参加である。米から抽出のエタノール製造は当初利益を生まなかったが、発酵を生かした様々な応用を模索するうちに上述のような製品開発に至り、良い出逢いもあって起業することができた。今はフラットに生きることを心掛け、Fermenting a Renewable Societyを目指し、①多様性を尊重Open & Inclusion、②常に学び、考え、動き続ける、Think, Learn, Never stop, Creating Beyond Imagination for Zeroの気持ちでいる。

——最後にメッセージをお願いします。

児玉：この機会に感謝したい。ICUへの親近感が増した。このネットワークを生かしたい。

酒井：感謝です。DAYはもっと実績を挙げてから、と拒んでいたが、今後への決意表明として受けた。

鈴木：リアルなら可能だった名刺交換とワインが頂けなくて残念。小さな大学なので、どこかで会ったら「私もICUです」とカミングアウトしてくれれば、そこから何か始まるかもしれない。

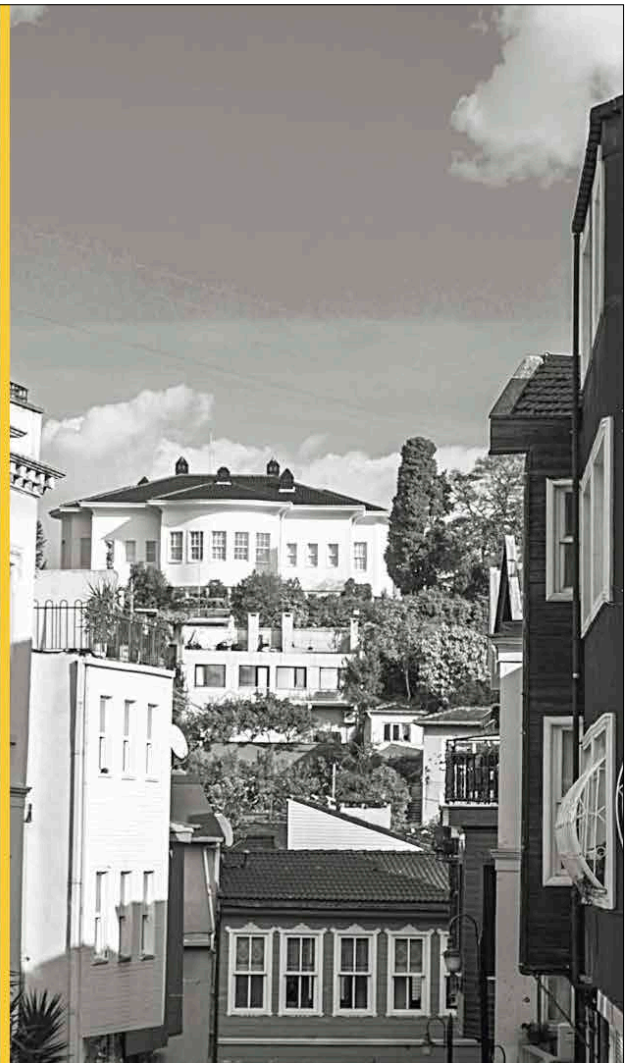


2022年新年企画！

写真を持ち寄って 世界を旅しよう

1/19(水)
19:00-20:30

ICU ONLINE
ALUMNI HOUSE



1月の参加募集。当日は香港、カナダ、アメリカ、イラク、ドイツ、イギリス、フランス、モルジブ、築地に鳥取、福井と時間をオーバーして盛り上がった。

いつでも誰でも参加できる、 ICU Online Alumni House活動開始!

文：浅場理早子（ICU同窓会副会長・組織部担当）

2020年6月、コロナ禍。ICUも同窓会も様々な影響を受け混乱していた最中に、新たな同窓会活動として「ICU Online Alumni House」が開始した。「卒業してもいつでも帰ってこられる場所」をテーマとして設置された活動だ。

この活動は、同窓会組織部が主導となって支部とともに検討し、産声を上げた企画。6月～8月の3カ月間にわたりオンラインで議論を重ね、練り上げられた本企画の発端は、「どんな活動があったら、同窓生・在学生在がICUと長くゆるく繋がりたいと思うだろうか?」、この問いから始まった。パンデミックの最中だからこそ、同窓生

への一方通行な情報提供に留まらず、双方向に創りあげていける、困ったら誰かが助けられる、そんな組織を考えたい、との起案からである。

38のアイデアが提出され、そのうちの3つの活動アイデアを組み合わせでできたのが、オンライン上でいつでも繋がれる仮想アラムナイハウス「ICU Online Alumni House」である。ハウス内には「Lounge」「Bar」の2つが存在する。

① Online Alumni Lounge

毎回異なるテーマが設定され、卒業生ゲストが該当テーマについて話し、同テーマに興味のある卒業生・在学生在

が聴きにきて、質問攻めにする時間(笑)。

② Online Alumni Bar

あつという間のLounge Timeの後は、まだ話し足りない人が残るBar Time。学年が違う参加者同士、少人数グループに分かれてドリンク片手に交流を楽しめる構成になっている。

2020年10月からパイロット版が開始し、2022年1月までに、毎回異なるテーマで10回の開催が実現した。例えば、Hawaii在住の同窓生によるテーマ「Hawaiiのクリスマスをみんなで楽しもう!」には、同窓生のお子様なども交わり、Hawaii料理を作っ

たり、フラダンスを習う。また、ある時は「アートとビジネス」のテーマに、全世界から興味のあるビジネスマン・ビジネスウーマンが集う。

2月以降も5月まで、スペシャルニーズの教育、ジャズなどの音楽といったテーマを予定している。「このテーマなら楽しそうだから、初めてだけどICU同窓会の活動に参加してみようかな」と思える機会を、これからも用意していきたい。

オンライン
アラムナイハウス
Facebook

<https://www.facebook.com/ICUOnlineAlumniHouse>



あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

三井住友信託銀行の遺言信託では、皆さまの財産に関するご意思を正確に反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。
まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2021年11月1日現在)
〈お申込時〉基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本など取り寄せに関する費用等が必要になります。※契約締結後に、解約、保管証正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。
〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます。(最低報酬額:1,100,000円) 上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。

この制度により遺贈をされる場合は基本手数料が5万円割引となります。ご相談の際にお申し出ください。

お問い合わせ・資料のご請求は

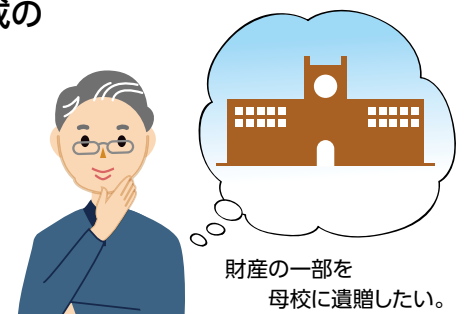
0120-181-536

受付時間

平日9:00～17:00(土・日・祝日および
12/31～1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託

検索



その人を信じて、その人に託す。Meet The Trust Bank





2021ホームカミング エネルギーに進んだ竹内弘高理事長のトーク

毎年、ICU祭期間中に開催されるホームカミング(大学と同窓会の共催)。

2021年は、竹内理事長のトークがオンラインで開催となり、200人を超える参加があった。

ICUで培われ、ハーバード・ビジネス・スクール(HBS)や一橋大学におけるキャリアで存分に発揮された、竹内氏の「体力」、「舞台力」、「知力」、そして「家族力」とは何か。明るくエネルギーに進んだ講演の模様をお伝えする。

文：古川英明(62 ID18) 写真：ホームカミングプロジェクトチーム提供

10月30日土曜日、ICU祭1日目にふさわしい晴天のキャンパスは静まり返っていた。史上初のオンライン形式となったICU祭で、パフォーマンスに出演する演者やICU祭実行委員の学生が構内を駆け巡る傍ら、東ヶ崎潔記念ダイアログハウス内にある国際会議室には、竹内弘高氏(13)ら登壇者が集い、画面越しに参加する200人以上の視聴者と共にオンラインのホームカミングが始まった。

ICU同窓会の長谷川攝氏(24 ID80)による案内と挨拶で幕を開けた後、岩切正一郎学長が登壇された。オンライン授業が続き、留学生へのビザも下りない苦境の中でも、竹内氏が明るく元気を与えてくれ、共に尽力していると述べられた。

そして、岩切学長からマイクを受け取った竹内理事長は、あたかも200人以上の視聴者がその場にいるかのように元気よく話し始めた。1時間半以上に渡り、立ったまま、終始ハキハキと喋るその源には、氏がICUで培った「体力」、「舞台力」、「知力」、そして「家族力」があった。まず、「体力」について圧巻である。サッカー部と野球部を創設しつつ、恋人(すなわち後に妻となる同期の信子さん)が所属していたゴルフ部の合宿にも参加した上、スキー合宿を毎年企画し、さらにはマラソン大会でも走るという、広大なICUキャンパスで鍛えられた体力面のエピソードを披露した。次に、「舞台力」。スピーチコンテストに出場したり、英語劇を演じたりしてステージに立つことの楽しさを覚え、それが教

育者としての素地を作ったのだと言う。「知力」については、社会科学部に在籍しながら自然科学や人文科学の学修をも通して「真・善・美」を身につけ学んだと言い、ICUのリベラルアーツへの感謝を述べた。そして「家族力」として、ICUで出会った信子さんのおかげで教育者への路を進んで今に至ったことを挙げた。それだけでなく、ICUのファミリースピリットとして、同年代の同窓生と共に、卒業後もあちこちでゴルフを楽しみ、今でもその絆が続いているようだ。

ICUで得たこれらの4つの力は、後にハーバード・ビジネス・スクール(HBS)や一橋大学での研究者・教育者としてのキャリアにおいて存分に活かされた。講師として就職したHBSでは、知力で教鞭を執りながら講義手法を徹底的に教え込まれ、学生との関係を築くために、ICUで培った体力を生かしてゴルフ、テニス、スキーのダウンヒルで学生と勝負し、勝ち続けたことが思い出だ。

HBSの次に一橋大学で教鞭を執ることになったのは、ICUの交換留学プログラムで学んだカリフォルニア大学バークレー校でMBAを取得した際、野中郁次郎氏と出会ったのが縁だったという。一橋大学では、ゼミ生の卒業の際に、義理・人情・浪花節を略したGNN(現在は義理・人情・恩返しのGNO)が入った「30の掟」を贈るが、学生が涙したこともあるという。それは、氏の舞台力が根底にある証だろう。

さらに、一橋大学では、2000年に新たに開校されたビジネススクールの

代表を務めた。実際に活躍するCEOに学生が2週間ついて回ることによって、学生が「シティズンシップ」としてボランティア体験を必修にしたりする新たな教育も取り入れた。このような社会貢献とも言える活動は、後に再びHBSに戻った折、東日本大震災の後の東北におけるボランティア科目の開講や、女性のエグゼクティブを増やす活動などへと続いていった。

2019年にICUの理事長になってから、新型コロナウイルスの感染拡大に対応しながらも、卒業生として初の理事長職を楽しんでおり、この数日前にも国外の受験生に向けて登壇したことなど、いろいろな場で充実した日々を味わっている。講演の最後に、理事長を務める理由に触れ、その一つが、先のGNOにも含まれる恩返しで

あり、信子さんを含めてさまざまな人に出会えたことへの感謝を挙げた。さらにもう一つの理由は、恩送りだと述べ、これまで多くの方々からの寄付によりICUの教育が成り立ってきたように、これからの卒業生のために務めると力強く決意を語った。

講演後の質疑応答では、質問が溢れ、HBSのMBAを持つ同窓会の竹川隆司氏(44 ID00)のファシリテーションで軽快に進められた。ICU同窓会の櫻井淳二会長(28 ID84)が一日も早くリアルで会えるようにとの願いを述べ、大学の富岡徹郎理事(26 ID82)は来年のホームカミングでは美しいキャンパスを見に来て欲しい、変わり続けるICUを愛してほしいと締め、ホームカミングは盛況のうちに幕を閉じた。

翻訳・通訳

料金表等資料をお送りします。
電話、メールでご請求ください。

心のこもった翻訳サービス

過去33年間に、**300名**近くのICU同窓生の皆さまにご利用いただきました。



- 品質を最も重視するEXIMは、精度に課題のあるとされる「機械翻訳システム」を使用せず、人の力による感性豊かな翻訳を心がけています。
- 試訳(無料)も承ります。

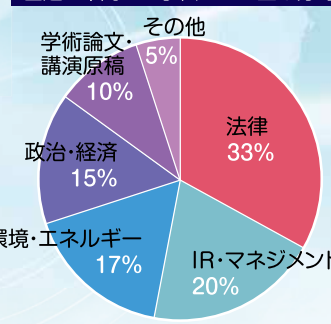
ICU同窓生 10%割引

翻訳・通訳・制作(デザイン・印刷)
(株)エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.
President 永島 克彦(14期) Advisor 比奈地 康晴(14期)

東京事務所 〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 セネラルビル3F
TEL 03-3431-2118 FAX 03-3431-2120
E-mail: tokyo@exim-int.com

横浜事務所 〒232-0063 横浜市中区中里2-14-5
TEL 045-721-4800 FAX 045-721-5165
E-mail: yokohama@exim-int.com

直近3年間に手伝った主な分野



分野	割合
法律	33%
IR・マネジメント	20%
環境・エネルギー	17%
政治・経済	15%
学術論文・講演原稿	10%
その他	5%

03-3431-2118
URL: <http://www.exim-int.com/>

お邪魔します！ あのメジャー

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回のメジャー紹介は、人文科学の領域から音楽メジャーを取り上げます。
すべてのジャンルと繋がる音楽学の魅力について、佐藤望教授にお話を伺いました。

文・写真: 亀山詩乃 (本誌)



音楽メジャーは敷居が高い？

音楽の知識や基礎訓練ができていないと音楽メジャーは選択できない、そう思って敬遠する人もいます。しかし、論理的な考え方ができて音楽に興味を持っている学生であれば、入学してから基礎から学べるので心配ありません。もちろん音楽というのは技術も必要で、技術を身に付けたい人も満足できる環境が整っています。少なくともICUの音楽メジャーのカリキュラムを履修し、ここで学べることを身につけたら、欧州や米国の大学院の音楽学のコースでも通用するレベルにまで行かれます。

音楽を必ずしも皆がメジャーとして専攻する必要はありません。それよりも、物理学・心理学・言語学・教育学など他専攻の人にもぜひ音楽の授業をとってほしいです。なぜなら、物事の考え方の基本や、あらゆる学問分野がリンクしているということを、音楽の学びが教えてくれるからです。

音楽学の魅力は、すべての分野とつながっていること

音楽学の魅力は、全ての分野とつながっていることでしょう。例えば、中世において音楽は数理的な学問の一つでした。現代でも、楽器の製作にはとても精密な計算が必要です。私が研究しているバロック時代は、修辞学と音楽の関係が非常に大きなテーマでした。音楽は人と人とのコミュニケーションの手段でもあります。言葉と音楽の関係にも音楽学は関心を持っています。音楽が文化の壁をいかにして越え

られるかという問題も大きなテーマです。心理学と音楽も深く関係しています。音楽は物理的な現象であり、心理的な現象であり、言語的な現象であり、歴史的な現象であり、そして文化的で芸術的な現象です。ある種、音楽を勉強すれば他の学問分野の理解が深まることは間違いありません。

音楽を知るのではなく、音楽を通じて何かを理解してほしい

2年前に音楽メジャーのカリキュラム改革をした時に、「音楽を学ぶ」という考え方から「音楽を通じて学ぶ」という考え方にシフトしました。音楽を通じて人間を学ぶ。音楽を通じて、理知的思考を・論理的思考を、メディア・リテラシーを、コミュニケーション・スキルを、人間にとって技術とは何か、人間の感情・感性とは何かを学ぶ、そういう考え方です。私たちは、音楽を知ってほしいと考えていると同時に、それにも増して、音楽を通じて何かを理解してほしいと思っています。

カリキュラムで重視しているのは、音楽を通じて考えることを学ぶことです。これは、現代人に不可欠なリテラシーです。また、音楽はあらゆる時代において、常に最新のテクノロジーを使って作られています。例えばオルガンという楽器は、重量の計算や建築やデザインなどの数学的な考え方がないと作れません。木工の技術のみならず、金属の加工方法も必要です。昔は現代のような機械がないため、同一の長さにするために職人が一つひとつ手で削っていました。どのくらい削るとどう

いう音になるか、パイプの太さと長さの比をどのように変えるとどういう音になるかなど、複雑な計算と経験の蓄積の上に成り立っているのです。時代が進んで電子技術が発達すると、人間は電子部品や半導体を使って電子楽器を作るようになります。コンピュータは現代の音楽創作に大切なツールです。ところが、現代の音楽家たちが使っている最新のテクノロジーも、宗教音楽センターにおいてある17世紀タイプの楽器も、鍵盤というインターフェイスが使われています。人間の身体の基本構造は昔も今もかわらないからです。つまり、音楽では「身体性」が重要です。

新たな取り組み：雅楽と合唱音楽

カリキュラム改革の一つの目玉として、雅楽と、合唱音楽の授業を始めました。雅楽は、古代の中国からやってきて、シルクロードを伝わっているいろんな国に広がった国際的な音楽です。それが平安時代頃に日本に広がりながら独自のレパートリーも生まれました。本国では当時の楽器も伝統も消えてしまいましたが、日本にだけ残っています。雅楽の授業はこの冬学期から本格的に始まりました。

私は一般教育科目で合唱音楽の授業を始めましたが、2021年度秋学期はコロナ禍でも受講生数を50人以下として対面形式で授業を行いました。最初の3週間はオンラインで座学の勉強をし、日本合唱連盟が出している感染予防の指針に沿って、自分たちは何を

第23回 音楽 佐藤望教授

SATO, Nozomi
国際基督教大学 教授

東京藝術大学音楽研究科修了。博士(音楽学)。東京藝術大学助手、慶應義塾大学教授を経て、2019年ICUに着任。『バロック音楽を考える』(2017年)、音楽と神学、音楽理論、演奏論、教育などの著書・論文がある。合唱指揮者、教会オルガニストとしても活躍。

恐れるべきで、何を諦めなくてもいいのかを理解する授業としました。アンサンブル・ジェネエドという名前で、授業の最後には観客も入れてチャペルで演奏会を開きました。対面の授業、やはり学生は嬉しそうでした。

コロナ禍でも守りたかったもの

ICUが大切にしているのは、対話とコミュニケーションの教育です。知識や論理を身につけることは、オンラインでできる部分もありますし、単語を覚えたり複雑な概念を理解したりするのは、もしかしたらオンラインの方が便利かもしれません。しかし、コミュニケーションは音声信号や、平面の画像だけでのやり取りだけではありません。空間と時間の共有、それによって共感しあうことは、コミュニケーションの非常に重要な部分です。

音楽は時間と空間を人間が共有する芸術です。教養教育で大事だと思っているのは、論理的で理知的な考え方、言語によるコミュニケーション、そして、身体や感覚を通じた知です。「身体や感覚を通じた知」はどこにでも存在していたけれど、これは一種の暗黙知だったのです。人が痛いとか悲しいとか辛いとかいうことは、オンラインでは教育できない、これは感覚とか身体を通じてしか教育できません。多くのオンライン授業が継続される中、私は昨年の秋学期から大学の方針に沿う限り対面にこだわってきました。できる教育を止めない、それが一番大事だと思っています。

音楽メジャーのデータ

●開講されている主なクラス(2021年度現在)
基礎音楽理論Ⅰ、Ⅱ
音楽演奏研究Ⅰ、Ⅱ
音楽フィールドワーク: 理論と実践
西洋の音楽
日本の音楽
音楽学入門
オルガン音楽入門
作曲研究
音楽マネジメント概論
音楽・舞台・映像
音楽特別研究 など

●担当教員(2021年8月現在)
佐藤 望
GILLAN, Matthew A.
他、非常勤講師

From the University

大学のページ

当ページは、ICUアーカイブズが連載を担当しています。

皆さまが在学されていた当時の歴史やこれまで知らなかったICUについて知る機会にもなるかと存じますので、ぜひ一読ください。

ICU Archives provides a series of articles for this section.

We hope these stories will give you an opportunity to learn about the history of ICU, looking back on those times when you studied here and discovering facts which you were not aware of till now.

文：松山龍彦（ICUアーカイブズ） Text by Tatsuhiko Matsuyama（ICU Archives）



語学研修所の学生達と鮎沢先生
/ Students and Prof. Iwao Ayusawa at ICU Language Institute



ICU牛乳の瓶（湯浅記念館所蔵）
/ An ICU Milk bottle (the ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum collection)



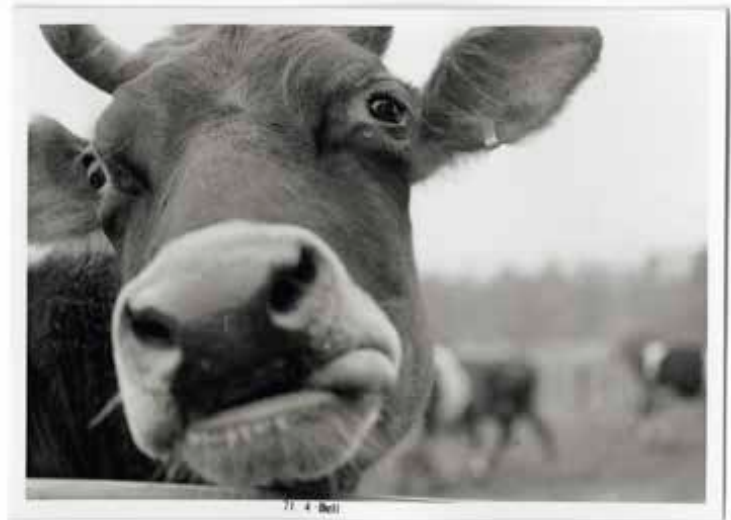
とうもろこしの種蒔 / Sowing corn



トラクターで畑をたがやす
/ Tilling the field with a tractor



牛乳の瓶詰めをする宗像さん
/ Mr. Munekata bottling milk



1971年 最後の牛たち / Last cows in 1971

牧場を渡る風

酪農家と大学

ICU牛乳をご存じでしょうか？ 大学創立初期にICU農場で生産されていた牛乳です。日本では珍しかったジャージー種という乳牛の乳は脂肪分が多く、ふたを開けてひっくり返しても牛乳がこぼれなかったという話が伝わっています。アーカイブズの資料を調べてみると、当時の農場の広さに驚かされます。現在の野川公園の南縁に沿った部分と武蔵野公園から自動車試験場にかけて。今のICUの三鷹キャンパスに匹敵する面積です。また、現在のICU高校や野球グラウンド・フィールドにかけても小麦畑が検討された形跡があり、実現していれば広大な牧場と畑に囲まれたキャンパスになっていたでしょう。この一大農場計画は何のためだったのか、アーカイブズの所蔵資料からいくつか推測できることがあります。

大学創立期の資料「国際基督教大学建設委員会日誌」によれば、校地の選

定を行っていた1947年に、大学の学部案として神学部・文学部・理学部そして農学部があげられています。「北海道の黒沢西蔵氏より十万円寄付申込を受けた」とも。黒沢西蔵は、1885（明治18）年生まれのカトリック教育者、酪農家、衆議院議員、酪農学園大学の創立者です。若くして田中正造・内村鑑三らの足尾銅山鉱毒災害地救済に関わり、20歳のとき北海道に渡り酪農家として立身。のちの雪印株式会社のもととなった北海道酪農協同株式会社を設立した酪農畜産の父と呼ばれる人物です。『酪農学園史』によれば「黒沢はつとに、大学程度の酪農研究指導のため（中略）総合大学の一環としての酪農大学の設置を決意して1947年6月上旬し（ICU）関係者と懇談し、計画の概要を説明して設置の希望を述べた（中略）同年6月に学園理事会を開いて、酪農大学設置に関する件を承認」とあり、「（ICUの）計画はその後変更になって、単科大学の教養学部として発足することになり、（中

略）取りあえず2年制の各種学校酪農学園大学部を申請して認可を得、時を経ずして短期大学へと移行した」と書いてあります。

教養学部単科大学への計画変更が表明されたのは、1949年6月に御殿場のYMCA東山荘で開かれた第1回理事会・評議員会の場だったと伝わっていますが、それ以前から積極的に関わっていた黒沢氏の名前がこの時期には目立たなくなっており、会議の参加者名簿にも名前がありません。総合大学計画変更の情報は事前に財団の主要メンバーに周知されていたと思われます。農学部計画が中止になった後も積極的に三鷹キャンパスでの農場・酪農事業が進められたのは時代の要請があったからでしょう。太平洋戦争時の兵力動員で日本の農業従事者不足は200万人に達しており、深刻な食糧難はこの頃まで尾を引いていました。農村厚生に関する研究フィールドとして、また農産物生産販売事業の副産物として教職員や学生らキャンパス住人の食糧を安

価に確保する方策として、ICU農場は誕生したのです。

乳と藁の日々

農場が開かれた正確な日付は不明ですが、1952（昭和27）年の春には組織的な農作が行われていました。創設初期から十数年間にわたって農場で乳製品生産に従事された宗像雅輔さんに、当時の貴重なお話を伺うことができました。宗像さんは1952年、前述の酪農学園短期大学を卒業後募集に応じて20歳で北海道からほかの2人の卒業生と三鷹の地にやってきました。2日ばかりで着いたときに湯浅八郎総長が直々に出迎えに来了。業務用のバンのような車に乗ってきたそうです。宿舎は今のアメリカンスクールのある辺りに建っていた東久邇宮の別邸だったと伝わるクニハウスの別棟。布団から茶碗までちゃんと用意してあって助かったとのことでした。

最初は家畜もおらず、酪農が専門の宗像さんも農作に従事していましたが、

翌5月にアメリカから鶏のひな数百羽が来ると状況が一変。急遽木工室職員に作ってもらったヒナの飼育箱を宿舍の台所において、ほかの2人とともに24時間体制で育てたそうです。10月にはカリフォルニアの農場主グリーン氏から寄贈された牛15頭、豚6頭、羊7頭が到着。牝牛のうち11頭が妊娠しておりベビーラッシュが予想されました。あらたに獣医の栗原氏一家が加わり、農場はにわかに賑やかになりました。クニハウスの母屋は仮の男子寮として使われていました。学生たちは隣に住む若い農場スタッフと懇意になり、農作業の手伝いも進んでやってくれたそうです。宗像氏の結婚式では彼らが協力して諸事を差配してくれま

したが、北海道から出てきた新郎の母親からも茶会の会費を徴収したとのことで、ICUの人間平等主義の行き過ぎた例として後々まで語り草になったそうです。また、費用は学食のスタッフが援助してくれたり、熱海への新婚旅行では大学が東京駅まで公用車を出してくれた話など、まさにICUファミリーと呼ばれるにふさわしいコミュニティがそこにあったことが分かりました。当初は、とにかく働きづめでした。早朝の牛小屋清掃からはじまり、搾乳・殺菌・瓶詰・牧草の刈入れ、飼料として育てたトウモロコシを刻んで露天サイロに置く。ジャージー種の乳は脂肪分が豊富でバターや生クリームをとるには最適だが、乳首が小さくホル

スタインの半分くらいしか出ないので生産効率が大変悪かったとのこと。のちにホルスタインなども来て最大時には5、60頭くらいにもなったそうです。学食隣接のミルクプラントでボイラーの蒸気を利用して低温殺菌62度30分、瓶詰めされたICU牛乳は学内や大沢周辺で販売・配達されたほか牟礼にあった東京神学大学、荻窪の東京衛生病院、教文館内のICU東京事務所へも配達されていました。農場事業のほとんどは1964年のICUゴルフコースの開場に合わせて終了しました。驚異的経済成長のおかげで、卵や乳製品を含む食品が安価に入手できるようになっていました。1971年までに牛たちは那須の南ヶ丘

牧場へ売られていきました。獣医の栗原氏も懇意にしていた人物を頼って同牧場へ転職。牛の世話をしていた湯川氏もそのあとに続いたそうです。宗像さんは腰を痛めたのを機に大学に申し出て1965年8月に事務局部門に異動となり、その後いくつかの部署を異動したあと1992年に定年退職し、40年にわたるICU生活を終えました。ICUゴルフコースは1970年代に東京都に売却されて都立野川公園となり、今では憩いの場として市民に愛されています。そこにかつての農場の面影を見ることはできませんが、芝生を渡る風の中に文字通りの牧歌的な人間同士の交わりと活動の息吹を聞いた気がしました。

Old ICU Had a Farm

A Farmer and the University

Have you heard of ICU Milk? It is the milk produced at the ICU farm in the early days of the university. Jersey cows, a type of dairy cow rare in Japan in those days, bore milk that was rich in fat. One sad that the milk did not spill even the bottle is held upside down, with the lid opened. Looking into the archives documents, we were surprised to know the size of the farm at that time. South-end area of the present Nogawa Park, and the area stretching from the Musashino Park to the Driver's License Center roughly add up to the size of the current ICU Mitaka campus. There was also the evidence of the planned wheat field at the present ICU High School area, plus the university football and baseball ground. ICU might have been a campus surrounded by a huge farm and fields. What was the purpose of this big farm plan? We have some clues for the answer in our archival documents.

According to the Journal of the University Committee on Organization in 1947, during the preparation period for a new university, while the school site selection was ongoing, 4 departments were considered to compose the college; Theology, Literature, Science, and Agriculture. “Received an offer for donation of 100,000 yen from Mr. Torizo Kurosawa of Hokkaido,” the journal also says. Torizo Kurosawa, born in 1885, was a Christian educator, a dairy farmer, a member of the House of Representatives, and the founder of the Rakuno Gakuen University. As a youth, he joined the relief work to save the pollution victims affected by the Ashio Copper Mine, following the leaders such as Shozo Tanaka, Kanzo Uchimura, and later moved to Hokkaido whéré he established himself as a dairy farmer. He came to be known as the father of dairy and livestock farming, who founded the Hokkaido Dairy Cooperative, which subsequently became Snow Brand Milk Products Co., Ltd. As per Rakuno gakuen shi (Rakuno Gakuen History), “Kurosawa had long decided on establishing an agri-

cultural college as a part of an university ... to provide the higher-level agricultural research and education, and moved to Tokyo in June 1947, where he held discussions with (ICU) officials and expressed the desire to establish the college after explaining the overview of the plan ... and joined the Board of Trustees meetings in June the same year where the proposal was approved.” “ICU's plan changed after that, as it came to launch as a liberal arts college As a consequence, he applied and gained a permission for two-year vocational school under Rakuno Gakuen University which soon became a junior college.”

The change of the plan for a liberal arts college is said to be first conveyed at the first meeting of the Board of Trustees and the Board of Councilors held at the YMCA Tozanso in Gotemba in June 1949. The name of Mr. Kurosawa, who had been actively involved till then, became less visible around this time and the name is not included in the attendee list of the meeting. The information regarding the plan change had supposedly been shared among the main members of the foundation in advance. The fact that the Mitaka campus actively pushed forward the farming and dairy farming projects even after the agricultural department plan had been abandoned maybe because of the demand of the times. Agricultural labor shortage in Japan reached 2 million, by the mobilization of soldiers for the Pacific War. The lingering effect of food shortage had continued till that time. The ICU farm would function as a research field for farming welfare as well as a measure to secure affordable food for the faculty, staff and students living on campus as a byproduct of the farm products production and sales.

The Days of Milk and Crops

The exact date on which the farm opened is unknown, but organized farming had already started in the spring of 1952. I was fortunate enough to interview Mr. Masasuke Munekata, who engaged in dairy production at the farm for more than 10 years from

the early days, and to hear on his experience at the farm. Mr. Munekata came to ICU from Hokkaido in 1952 at his age of 20 after graduating from the aforementioned Rakuno Gakuen Dairy Academy Junior College along with two other graduates in response to recruitment. When they reached after two days of traveling, President Hachiro Yusa himself came to receive them. He came in a car looked somewhat like a commercial-use van. Mr. Munekata and colleagues stayed at the annex of Kuni House, which is said to be a villa which had belonged to Prince Naruhiko Higashikuni located in the area near the American School now. They were provided everything from bedding to bowls, which was very helpful, according to Mr. Munekata.

Initially the farm did not have livestock, so Mr. Munekata, who specialized in dairy farming, also engaged in crop farming, but the situation has totally changed in following May as several hundreds of chicks arrived from the United States. Mr. Munekata and two other farmhands took care of the chicks in the fast-built cage made by the woodcraft staff, placing it in their kitchen floor, round the clock. In October, fifteen heads of cattle, six pigs, and seven sheep donated by a Californian farmer, Mr. Greenough reached the farm. Eleven of the cows were pregnant and a baby rush was expected. Veterinary doctor Mr. Kurihara newly joined with his family, and the farm suddenly got lively. The main building of Kuni House was used as a temporary male student dorm. The students became close to the young farm staff living next door and voluntarily helped with their farm works. The students even worked together to arrange the wedding ceremony of Mr. Munekata. The story that the students charged the mother of the bridegroom who came from Hokkaido, for entering the tea party has been handed down as an example of the excessive sense of equality at ICU. The cafeteria staff also helped with the cost of the wedding and the university offered its official vehicle to the Tokyo Station for Mr. Munekata and his wife to go on their honeymoon trip to Atami. I learned from the interview that there

was a community that can be called the ICU family.

In the initial days, they worked without sleep. Starting with the cleaning of the cow shed in early morning, they milked cows, pasteurized milk, bottled it, harvested grass, and chopped corn that was grown as feed and stored it in an open-air silo. The milk of the Jersey cows is rich in fat and it is best suited for making butter and fresh cream. Their teats are small and can produce only a half of what Holstein cows would produce, making production very inefficient. The farm afterwards adopted Holsteins and held as many as 50 to 60 cows then. The milk was pasteurized for 30 minutes at 62 degrees Celsius using steam from the boiler at the milk plant adjacent to the university cafeteria and bottled. ICU milk was delivered and sold on campus and locations in and around Osawa in addition to the Tokyo Union Theological Seminary in Mure, Tokyo Sanitarium Hospital in Ogikubo, and ICU Tokyo Office in Kyobunkwan.

Most of ICU's farming project was shut down with the opening of the ICU Golf Course in 1964. Japan's extraordinary economic growth made food including eggs and dairy products affordable to everyone with cheaper price. By 1971, all cows were sold to Minami-gaoka Dairy in Nasu. Mr. Kurihara, the veterinarian, also moved to the farm counting on his close friend. Mr. Yukawa, who was looking after the cows, also followed Mr. Kurihara. Mr. Munekata hurt his back, and when apprised of the situation, the university transferred him to an administrative division in August 1965. After then, he worked at several departments and closed his 40 years of ICU life in 1992 at his retirement. The ICU Golf Course was sold to the Tokyo Metropolitan Government in 1970s and became the Tokyo Metropolitan Nogawa Park, which is still loved by the local residents as a place for relaxation. We can no longer find any remains of the farm there, but I could see the visions of the peaceful exchange of the farm neighborhoods, while feeling the wind come across the lawn on my cheek.



photo: 望月厚志 (キャンパス風景)

From the Alumni House

アラムナイハウスから

第3回基督教伝道献身者の会懇親会報告

文：有馬平吉 (18)



昨年の第2回の懇談会は、コロナ禍でオンラインの態勢も整わず残念ながら中止となりましたが、今年是对面とオンラインを併用して2021年11月3日に無事行うことができ、途中若干名の出入りもありましたが、約30人の方々が参加されました。讃美歌を全員で高らかに歌った後、伊藤瑞男さん(4)の開会の祈祷、有馬平吉(18)の司会で当日の参加者の紹介、その後、長沢道子さん(8)と矢澤俊彦さん(9)に「ショートスピーチ」をして頂きました。

後半は伊藤英志さん(33 ID89)のご指導で「ICUのCクイズ」を共に楽しみ、その後参加者全員に一言ずつ自由にお話し頂きました。

卒業生の伝道献身者の皆様の「証言集」の編集が始まっていますが、その進捗状況等について梅津裕美さん(27 ID83)が報告して下さいました。

最後に左近和子さん(8)の伴奏で「ICUソング」を歌い、北原葉子さん(33 ID89)の祈祷と、記念写真撮影をもって、会は無事終了しました。

同窓会グッズのご紹介

〈桜グッズ〉

ICUの桜から誕生したグッズは、売上代金の10%がICUの美しい桜並木を未来につなげるための資金として大学に寄付されます。是非ご購入いただき、手に取るたびにあの桜並木を思い出してください。(価格はすべて税込です)



★ スマホスタンド

幅7cm、奥行き8cm、高さ10cm(組立時)、価格は1500円です。



★ 箸

若狭塗。箸の長さは23cm。箱付き。価格は1000円です。



★ フォトフレーム

横型(縦も可)。壁掛けもできます。はがき(写真L版兼用)サイズ。幅19.2cm、奥行き7.1cm、高さ14.8cm(組立時)、価格は3564円です。



★ マグネット

縦1.5cm、横幅20cm、厚さ1cm。価格は509円です。



★ キーホルダー

桜材部分は縦3cm、横3cm、厚さ5mm。価格は407円です。

商品詳細は、同窓会Webサイトの同窓会グッズのページ(<https://www.icualumni.com/activities/goods/>)を御参照ください。ご購入ご希望の方は、品名、個数、お名前、お電話番号、商品の送付先をaaoffice@icualumni.comまでご連絡ください。追って、代金、送料の振込先情報を連絡いたします。入金確認後に発送いたします。

桜グッズ以外にも文房具、トートバッグ、マグカップ、キャップ、くまのぬいぐるみ、ネクタイ、スカーフなど沢山の魅力的な商品を取り揃えております。

2020年に開設された同窓会グッズ通販サイト「ICUアラムナイショップ」(<https://shop.icualumni.com>)では、より多くの素敵なグッズをお手元に置いていただきたい、送料を少しでも安くできたら、という思いから、少しお得なパッケージ商品を販売しております。クレジットカード払い(海外のカードはご利用いただけません)やコンビニ払いもご利用いただくことができるようになりました。是非ご利用ください。



ICU 教会での結婚式のご予約・ご相談は株式会社 ICU サービスまで！

株式会社 ICU サービス

国際基督教大学 本部棟 2 階
TEL: 0422-33-3530 MAIL: info@icu-service.com

松本中央法律事務所

Matsumoto Central Law Office

弁護士 松本 典子
(ID01・45 期・理学科生物学専攻卒業)
懇切丁寧に対応いたします。
お気軽にお問い合わせください。

全国から ZOOM・電話相談対応

TEL 03-5776-2435 東京都中央区日本橋小網町 8-2
WEB <https://www.m-laws.jp> E-mail: n.matsu@m-law.jp

取扱分野：企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護など

「青柳清孝先生を偲ぶ会」
についてのお知らせ

文：深澤秀夫 (21 ID77)

青柳清孝先生が、2021年4月19日、享年90歳にて帰天されました。しかしながら、折悪しくコロナウィルスの第四波と重なったため、先生のご葬儀は、ご家族と近親者の方々のみで執り行わざるをえませんでした。そこで、青柳真智子先生のご意向を受け、有志にて下記期日にあらためて「青柳清孝先生を偲ぶ会」を開催させて頂きたく、ここにご案内をさし上げる次第です。

日時：2022年4月10日(日曜日)
(開場 午後1時30分)
午後2時～午後4時
場所：ICU大学礼拝堂
会費：無料
連絡先：「偲ぶ会」に出席をご希望される方は、下記宛先にメールで、
a.お名前、b.連絡先(メールアドレス/住所/電話番号)、c.同伴者があ
る場合はその人数とお名前とご関係を、
3月20日(水)までにお知らせくだ
さるようお願い申し上げます。

深澤秀夫メールアドレス：
ambilomavo@yahoo.co.jp
呼びかけ人(abc順)
深澤秀夫 (21 ID77)・加藤恵
津子 (ICU教員)・森枝卓士 (22
ID78)・西尾隆 (22 ID78)

寄付者御芳名 Donors

河崎美佐子 (7)
石川尚志 (11)
齋藤顕一 (17)
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人 Missing

池田英人 (35 ID91)
深見淳 (43 ID99)
田中智己 (49 ID05)
小山英恵 (55 ID11)
市村脩一郎 (57 ID13)
木内萌乃 (61 ID17)
野邊大樹 (61 ID17)
鳴島歳紀 (63 ID19)
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

高橋澄男 元教職員
阿部宣明 (1)
荒井宏師 (1)
丸本郁子 (2)
早川照男 (3)
角田達夫 (4)
岡田典夫 (8)
荘司和子 (9)
岩田恒子 (9)
永田晴康 (21 ID77)
金田正也 (G1967)
田山穂 (G1977)
AN135号の訃報に掲載されました加藤英章 (2) 氏のお名前に間違いがございました。訂正し、お詫びいたします。
心よりお悔やみ申し上げます。

カナダハウス開寮60周年
イベント開催へ

文：伊藤悠希 (67 ID23) 藤田直志 (25 ID81)

紳士然としクリーンな男子寮と呼ばれ、近代合理主義の支配から唯一逃れたカナダハウス。クリーンさを保つためか、いたずらか、その庭には自転車や冷蔵庫、そして●●が埋まっている(と言われる)。そのカナダハウスが2022年、開寮60周年を迎えます。

昨年には同窓会カナダハウス支部が認められ、発足しました。久しぶりに顔を合わせたり、世代を超えて交流が生まれたり、といった場を、60周年を機に作っていきたいと思っています。春以降にICU食堂で記念パーティーを開催すべく企画しており、大学とも相談中です。Facebookに、カナダハウス同窓生のグループを作りました。同窓生の方、まずはdearcanadahouse@gmail.comまでご連絡ください。Facebookグループへの招待や、イベントの案内などをお送りします。

私たち、「カナダハウス勝手に同窓会」実行委員も全力で頑張ります。みんなで最高のカナダハウス60周年にしましょう!!!! (伊藤悠希)

三鷹の大沢の森の奥のコンクリートの社に共に暮らした若者たちが、大いなる世界に巣立ち、今日まで何を考え、どう生きて来たのかを若者たちに語り、彼らの未来に幸あれと願う集いを計画します。カナダハウス60周年記念プロジェクトが始動します! (同窓会カナダハウス支部長＝藤田直志)

アラムナイニュースWeb版配信のお申込について

アラムナイニュースWEB版の配信をご希望の方は、下記フォームへご連絡ください。郵送でのお届けからメール配信に切り替えさせていただきます。

こちらからお手続きください

→<https://forms.gle/gUZ3YzXb3QpGpPMt6>

QRコードはこちら→



DAY賞候補者をご推薦ください

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方(卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

※推薦は年間を通して受け付けておりますが、前年10月15日受け付分までを選考対象として翌年の桜祭りで受賞者を表彰します。

※受賞者は同窓会Webサイトで発表するとともに、アラムナイニュースでお知らせいたします。

※推薦および選考については公開されません。

※自薦・他薦を問いません。

※推薦方法 WebフォームからもDAY賞候補者推薦ができるようになりました!
<https://www.icualumni.com/activities/day/>

Webサイトの「DAY賞」のページから[推薦フォーム]に、あるいは[推薦用紙PDF]をダウンロードして、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてにお送りください。郵送/FaxまたはE-mailで受け付けております。

※必要事項

- ・推薦したい方の氏名と卒業年、あるいは在籍年(分かる範囲で)
- ・推薦理由(新聞記事などの客観的資料があれば併せてお送りください)
- ・あなた(推薦者)の氏名と卒業年
- ・あなた(推薦者)の住所・Tel・E-mailアドレス

※歴代受賞者名もWebサイトに掲載しております。



ICU同窓会事務局
〒181-8585東京都三鷹市大沢3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
E-mail：aaoffice@icualumni.com



3月26日

今年も土曜日にオンライン開催
Online on Saturday

2022年3月26日開催 桜祭りのお知らせ

春の訪れとともに、同窓会「桜祭り」を開催します。17回目を迎える同窓会「桜祭り」は、同窓会年次総会、DAY賞（※）表彰式、卒業50周年記念式典など、年に一度の同窓会総合イベントです。

今年も、未だコロナ収束が見通せないため、オンラインで開催いたします。

普段キャンパスまで足を運びにくい方にもご参加いただける機会となります。同窓会や大学に関する最新の情報をお届けいたします。また、改装が完了したD館の様子もご紹介いたします。たくさんの同窓生の皆さまにご参加いただきますようお願い申し上げます。

開催日：2022年3月26日（土）10:00～13:30（開室9:30）

形態：オンライン（zoom）

プログラム：10:00～12:30 第1部 同窓会総会、卒業50周年記念式典

DAY 賞表彰式ほか

12:30～13:30 第2部 D館紹介ほか

〔卒業50周年の方〕交流セッション

参加申込：以下の申し込みフォームからお申し込みください。

<https://forms.gle/w1fpFYZUBorYk616>

QR コードはこちら →



DAY賞（Distinguished Alumni of the Year Award）2022受賞者決定！



井伊雅子

Masako Ii (30 ID86)

医療経済学者、一橋大学大学院 国際・公共政策大学院教授。2005年から現職。アジア公共政策プログラム・ディレクターとしてアジアの若手官僚の育成に貢献してきた。質と財政の両立を計るプライマリ・ケアの構築や不確実性の下での医療に関する意思決定などを研究。コロナ禍で、感染対策に対応できるより良い医療制度構築に向けた提言などを積極的に発信。学外でも日本学術会議会員、NHK経営委員会委員、政府税制調査会委員などを歴任、多方面で活躍している。

Expert of Health Economics and Professor of Hitotsubashi University Graduate School of Economics. Also Director for Asian Public Policy Program, School of International and Public Policy. After ICU, she received Ph.D. in Economics at Wisconsin University Madison then joined the World Bank. Her main research subjects are primary care with a balance between quality of healthcare and budget allocation, and healthcare under uncertain circumstances. Since the Corona pandemic started, she has been proactively speaking out about a better medical care system to manage such situations. She is also active beyond academic areas, including being appointed to Government's tax commission member, member of Board of Governors for NHK etc.



大久保真紀

Maki Okubo (30 ID86)

ジャーナリスト、朝日新聞編集委員。ICU卒業後、同社入社。中国残留日本人が歩んだ厳しい人生、虐待を受けた子供たち、遺伝性難病の患者、性暴力の被害者、12歳で売春宿に売られてHIVに感染し、タイのNGOに保護された少女ら、「様々な社会的弱者の実態を長期間にわたって取材し、報じてきた」ことを高く評価され、2021年度の日本記者クラブ賞を受賞。1995年から受賞の日までに読者から届いた手紙が1,554通ということから分かるように、それらの記事は読者の心に届き、大きな支持を得ている。

A journalist, Senior Staff Writer at the Asahi Shimbun Newspapers, the 2021 recipient of the Japan National Press Club Award, which is given to Japan's leading journalists. She was highly praised for her "long-term coverage and reporting on the realities of societies." Her coverage targets include the Japanese children and women left behind in China after WWII, abused children, patients with hereditary intractable diseases, victims of sexual violence, and girls sold to brothels at the age of 12, infected with HIV, and sheltered by a Thai NGO. As you see from the 1554 letters received from readers from 1995 to the date of the award, those articles have reached the hearts of readers and have received great support.

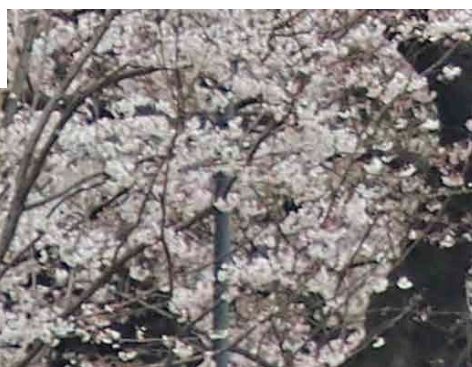


大塚桃奈

Momona Otsuka (64 ID20)

高校3年時のイギリス留学をきっかけに、服を取り巻く社会問題に課題意識を持ち、ICU在学中もコスタリカ、スウェーデンなどに自ら留学。卒業後、徳島県・上勝町へ移住、現在株式会社BIG EYE COMPANYのChief Environmental Officer (CEO) として、公共複合型施設「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」を運営し、併設するホテルにはコロナ禍の中で年間1,200人の宿泊客を集める。2003年に自治体で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」をした人口約1,500人の上勝町で、日々のごみと向き合い、循環型社会の実現を目指す活動に伴走中。

Momona Otsuka is CEO (Chief Environmental Officer) of BIG EYE COMPANY, located in Kamikatsu-cho, a small town in Tokushima known for the Japan's first town which made "zero waste" declaration in 2003. She is currently managing the town's key facility for "zero waste" called Kamikatsu Zero Waste Center, consisting of recycling waste bins & stock yard, learning center, collaborative laboratory, and the accommodation facility, and has successfully gathered over 1,200 people from all over Japan in one year to the town with a population of 1,500.



東 哲郎

Tetsuro Higashi (16 1973年卒)

元東京エレクトロン（株）会長・社長。ICU時代は哲学、経済史を主に学び、ICU卒業後は東京都立大学大学院（日本経済史）へ進学、研究者を志す。しかし、4年間大学院に在籍後、27歳で当時のベンチャー企業である東京エレクトロン（株）に入社。46歳で社長に抜擢され、同社を世界的半導体製造装置メーカーへと大きく成長させた。他に日本並びに世界の業界団体会長を務めるとともに、経産省の半導体・デジタル産業戦略検討会議座長等を歴任。2020年春の叙勲で旭日重光章を受賞。2021年4月には日本経済新聞『私の履歴書』を同窓生として初めて執筆した。

Former Chairman and President of Tokyo Electron Limited. During the ICU era, he mainly studied philosophy and economic history, and after graduating from ICU went on to graduate school at Tokyo Metropolitan University (Japanese economic history) and aspired to be a researcher. However, after enrolling in graduate school for four years, he joined Tokyo Electron Limited, a venture company at the time, at the age of 27. He was appointed president at the age of 46 and has grown the company into a global semiconductor manufacturing equipment manufacturer. In addition to serving as chairman of industry groups in Japan and around the world, he has also served as chairman of the Semiconductor and Digital Industry Strategy Review Conference of the Ministry of Economy, Trade and Industry. Awarded with the Order of the Rising Sun, Gold and Silver Star in 2020. In April 2021, he was the first alum to write "My Personal History" (watashi no rirekisho) on the Nikkei Newspaper.

今年も桜祭りはオンライン開催
遠方の方もこの機会に是非ご参加ください
時空を超えて集いましょう

(※) DAY賞(Distinguished Alumni of the Year Award)は、ICUに在籍したことのある方(卒業生・留学生・旧教職員を含む)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるため毎年授与されるもので、今年は6人の卒業生に授与されることになりました。

※卒業50周年の16期生の皆様は別途お送りのご案内状からご連絡ください。
お願い：出席、欠席にかかわらず、出欠のご連絡をお願い申し上げます。

申込締切：3月13日(日)

お問合せ：同窓会事務局 メール：aaoffice@icualumni.com

詳細につきましては、同窓会Webサイト
<https://www.icualumni.com/>をご参照ください。

QRコードはこちら →



平井一夫
Kazuo Hirai (27 ID83)

ICUで国際法を学び、1984年に卒業後CBS・ソニー(現 ソニー・ミュージックエンタテインメント)入社。1994年にソニーミュージックNYオフィス、その後ソニー・コンピュータエンタテインメント米国法人社長を経て、2007年ソニー・コンピュータエンタテインメント(現 ソニー・インタラクティブエンタテインメント)社長。2009年からソニー(現 ソニーグループ)EVP、2011年副社長、2012年からの社長兼CEO在任中に歴史的ターンアラウンドを実現。2018年会長、2019年よりソニーグループシニアアドバイザー。2021年『ソニー再生』刊行、全ての収益は子供の貧困や教育格差の解消のために自ら立ち上げた一般社団法人プロジェクト希望を通じて寄付される。ICU知名度向上、大学・同窓会活動にも大いに貢献。

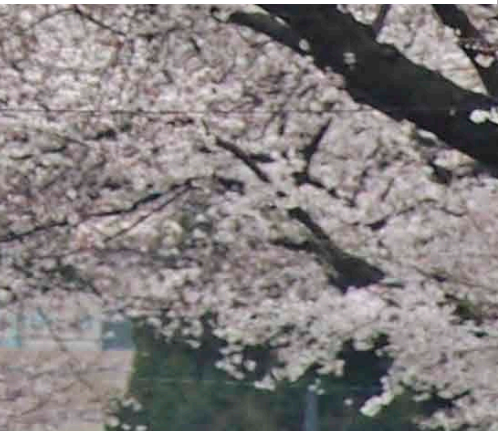
Studied International Law at ICU. Joined CBS/Sony (now Sony Music Entertainment (Japan) Inc. (SMEJ)) after graduation. Moved to SMEJ's New York office in 1994. Appointed President and Chief Operating Officer of Sony Computer Entertainment America in 1999 and became President and Group Chief Operating Officer of Sony Computer Entertainment (Now Sony Interactive Entertainment) in 2006. In 2009, became EVP, Sony Corporation (Now Sony Group Corporation). After appointed Executive Deputy President in 2011, promoted to President and CEO in 2012 whereby achieving a historic turn around. He became Senior Advisor, Sony Group Corporation in 2019. Published "Recreating Sony" (tentative title in English) in 2021 and all proceeds will be donated through 'Project KIBO (Hope in English)', which was launched by himself to eliminate child poverty and educational disparities. Greatly contributed to increasing the ICU name recognition and actively contributed to ICU and Alumni Association activities.



並木浩一
Koichi Namiki (2 1958年卒)

ICU名誉教授。日本で最も尊敬され、功成り遂げた神学者の一人であるだけでなく、聖職あるいは慈善事業、又はミッションスクールに奉職している多くのICU卒業生のメンターでもある。近年の著作は「ヨブ記注解」を始めとする旧約聖書を中心とするものであり、その活動はICUでの講義、論文発表、チャペルアワー説教に留まらず、学外での講演、シンポジウム、教会説教に及ぶ。氏のユニークな神学が、広く社会学、人文科学、詩学、日本学にまでも包含するのは、ICUでのリベラルアーツに根ざすからであろう。

Known as one of the most revered and accomplished theologists in Japan. He also plays a role as the mentor for ICU alumni engaged in missionary, social works, and education at various Christian institutions. His current literary works include "A Commentary on the Book of Job" and a series of authorship of the Old Testament. His accomplishment is not limited to the publication of numerous dissertations, teaching, preaching, and missionary activities at ICU but also extends to the lectures, symposiums, and preaching at churches outside of ICU. His unique scope of theological academism embraces sociology, politics, humanities, poetry, and Japanology which might have stemmed from the "liberal arts" nurtured at ICU.



STAFF

EDITOR IN CHIEF
新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)

MANAGING EDITOR
松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS
望月厚志 MOCHIZUKI, Atsushi (26 ID82)
池島広子 IKESHIMA, Hiroko (27 ID83)
神内一郎 JINNAI, Ichiro (33 ID89/G1992)
太田順子 OTA, Junko (35 ID91)
谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)
亀山詩乃 KAMEYAMA, Shino (54 ID10)
滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)
水野愛子 MIZUNO, Aiko (62 ID18)
関川紀世龍 SEKIKAWA, Kiyotatsu (69 ID25)

ART DIRECTOR
佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR
坂井健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

EXECUTIVE DIRECTOR
松島真理 MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)

PUBLISHER
櫻井淳二 SAKURAI, Junji (28 ID84)

cover photo: 湯浅八郎記念館、松島真理
backcover photo: ICU アーカイブズ、ICU HONEY PROJECT、米川充

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等と一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいいれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

■大学・同窓会に関する情報が満載です。
ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト
<https://www.icualumni.com/>
同窓会 Facebook
<https://www.facebook.com/icualumniassociation>
大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>
JICUFWeb サイト <https://www.jicuf.org/>

■ ICU 同窓会事務局
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
Email：aaoffice@icualumni.com

